

## 第1章 調査の経過

今年度の調査区は、整備委員会の指導・助言に基き、史跡整備計画地の北西部に設定した。これまでの調査資料、試掘調査の結果から、永福寺三大伽藍の一つである薬師堂と薬師堂の両側面に取り付く複廊、翼廊が確認できるものと予想された。

調査区は、薬師堂の位置及び規模の確認に主眼を置いて、C・D-2・3区内に、すでに確認した二階堂、阿弥陀堂の南北の軸線（桁行方向）に平行するように設定した。

また次年度以後の調査のために、整備委員会の指導・助言により、主調査区の北側に遺構埋没深度確認用の試掘塲を5ヶ所（1～5地点）と苑池範囲確認用の試掘塲を17ヶ所（A～Q地点）設定した。

現地調査は、昭和61年8月20日に開始し、約560㎡を発掘して11月18日までに埋め戻し及びすべての調査を完了した。その間の経過について以下日誌の抜粋を記す。

8月20日 重機が入り掘削を開始する。礎石と思われる大きさ約1mの伊豆石を3ヶ所検出する。

8月28日 調査区内に測量原点（D-3杭）を設定する。

8月29日 設定した測量原点を基準に、調査区を5m方眼で割り付ける。

9月3日 昨日からの降雨で、調査区の南、西、北壁が崩れる。

9月10日 検出した建物内で、礎石、礎石掘方と、調査区西で建物に平行する石列を検出する。

9月13日 木造基壇束柱になるとと思われる掘立柱掘方を建物の北辺で一部確認する。

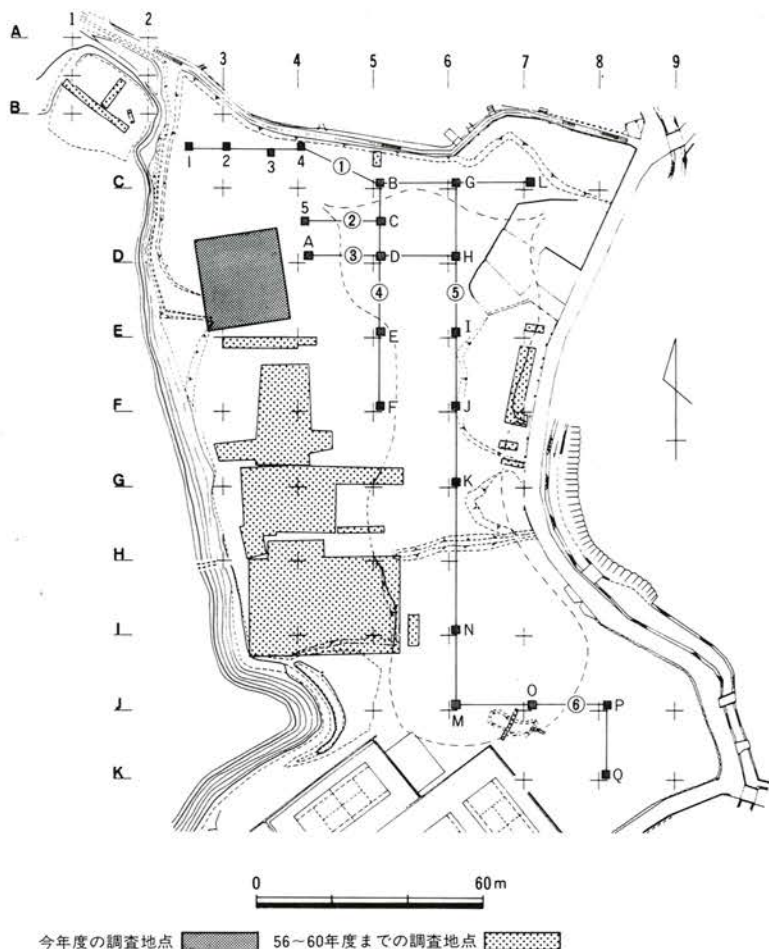


図1 調査地点位置図及び苑池範囲推定図(1～5. A～Qは試掘地点)

- 9月26日 遺構概念図を作成する。
- 9月30日 今日より建物の礎石掘方の掘下げを行う。礎石掘方7・9で根石を確認する。
- 10月1日 降雨により、調査区北壁再度崩れる。
- 10月3日 崩れた北壁の切り治し中に、原位置を留める中型(60cm大)の礎石2コを検出する。
- 10月6日 建物の礎石掘方、掘立柱掘方の掘下げを行う。
- 10月13日 掘立柱掘方の写真及びセクション図の作成。
- 10月21日 調査区内を1m方眼で割り付けて平面実測に入る。
- 10月31日 全景写真の撮影を開始する。
- 11月6日 全景写真の撮影を終了する。北部地区の試掘壕を設定する。
- 11月7日 平面図のレベル記入を行う。
- 11月11日 苑池範囲確認のために17ヶ所に試掘壕を設定する。
- 11月18日 器材を撤収して現地調査を終了する。

## 第2章 検出された遺構

### 1. 層序及び概要

史跡整備計画地の北西部に設定した今年度の調査地点の遺構埋没深度は、昨年度の調査地点とは大きく異なり、腐食土層である現地表面から遺構検出面まで深い所で170cm、浅い所では140cmである。これは地形に大きく影響されたためで、昨年度の調査区は西ヶ谷と亀ヶ淵からの流水によって形成された扇状地の先端近くに位置したため、谷から流れ込んでくる土砂の量が少なかった。今年度の調査区は、谷奥に位置するため遺構面上に堆積する土砂の量が多い。このために今年度の調査は、終始調査区壁面の崩落と湧水に悩まされた。

表土下の水田等の、旧耕作土である灰色粘質土は約60cmの厚さで堆積する。灰色粘質土の下から遺構面上まで、30～60cm程の厚さで灰色粘土が覆っている。灰色粘質土層と灰色粘度層の中間に、宝永四年の富士山の火山灰が良好な状態で観察された。重機による掘削中に、堂を支えていた大型の礎石の上面に、この火山灰が付着していることが観察された。このことは火山灰が良好な状態で残っていることと考え合わせて、永福寺が最終炎上消失した応永12年から宝永四年までの約300年の間に削平などによる遺構の変更が行われて、以後現在まで人工的な掘削は遺構まで達していない。これは昨年度の概要報告書の層序及び概要の中で述べたことと矛盾しない。

遺構検出面は概ね標高19.10mである。薬師堂内では19.20～19.40mと堂周囲よりも高まっている。これは基壇の高まりを僅かに留めているためと思われる。

遺構検出面は黒色土(地山)である。遺構検出中に面上からコンテナ一箱の古代の遺物を取り上

げた。遺構は確認されなかったが、古代から人々の生活が営まれていたと思われる。

黒色土面上の土丹による地業は、今年度の調査では確認していない。

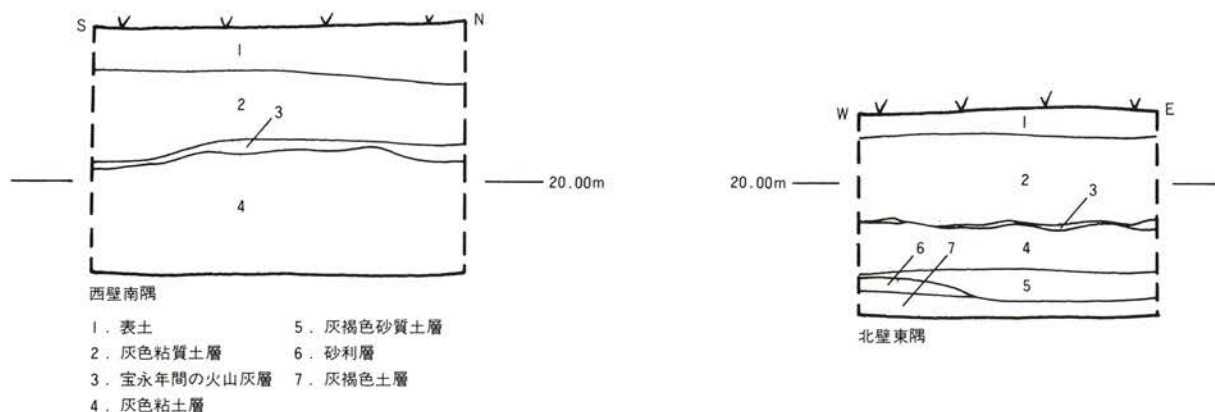


図2 61年度調査区標準土層柱状図

## 2. 薬師堂

### 基壇

基壇を構成するような版築は、後世の削平のためか遺存していない。基盤層である黒色土(地山)面の高まりが僅かに基壇の痕跡を留めている。

#### 〔束柱掘方〕

堂跡の周囲で、二階堂や阿弥陀堂でも確認している掘立柱掘方を検出した。

掘立柱掘方は全部で44穴を数える。形は長径で70～110cm、短径で50～85cm程の楕円ないし長方形で、遺構面を30～60cm程度掘り込み堂跡を取り囲むように配置されている。

覆土は、細かい土丹粒を含む黒色土である。この黒色土を覆土に持つ掘方には、すべて長方形ないし正方形の断面形を持つ角柱が遺存している。角柱が抜き取られている掘方の覆土は、遺構面上を覆っている灰色粘土である。

#### 〔角柱〕(図3、図版15-4)

44穴検出した掘立柱掘方の内15穴(ア・イ・ウ・オ・ケ・ス・ヒ・フ・マ・ミ・メ・ユ・ラ・ル・ロ)で、木造基壇外装の束柱に使われた角柱を確認した。この角柱は長辺で21～21.9cm、短辺で17～20cmである。長辺を建物に平行するように据られていた。

掘方内に遺存する角柱は、すべて表面に短冊状に薄く剥いだ樹皮が貼付けられていた。おそらく角柱の防腐措置と思われる。角柱の遺存していない掘方でも樹皮だけは確認している。中には抜き取られた角柱の形に樹皮が長方形に残り、概ね角柱の位置が推定できる掘方もあった。

遺存する15本の角柱の内遺存状態の良好な、(ア)・(イ)・(ウ)をサンプルとして取り上げた。

角柱(ア)は、基壇四隅（ア・サ・ヌ・ム）にあたる掘立柱掘方の中でただ1点角柱が遺存していた。21.9cm×21.9cmと正方形の断面形を持つ。正方形なのは、北と西方向からの柱見付を統一したためと思われる。

角柱(イ)は、角柱(ア)の東隣りに位置する。寸法は、21.6cm×18.4cmと長方形の断面形を持ち、掘方の底に据えられた30cm大の礎石の上に据られている。礎石と接する底面が、T字形に加工されている。いわゆる鼻ぐりとも異なり穿穴もされていない。転用材の可能性も捨てきれない。

角柱(ウ)は、角柱(イ)の東隣りに位置する。ここは薬師堂より北に延びる左翼廊が取り付く位置にあたる。寸法は21.9cm×20cmと正方形に近い断面形を持つ。

概ね角柱の長辺の長さは、7寸に統一されている。

また長辺が建物に平行するように据られている。樹皮による防腐措置や、角柱が四面ともていねいに平らに仕上げてあることから、この角柱は木造壇上積基壇の束柱になるとと思われる。

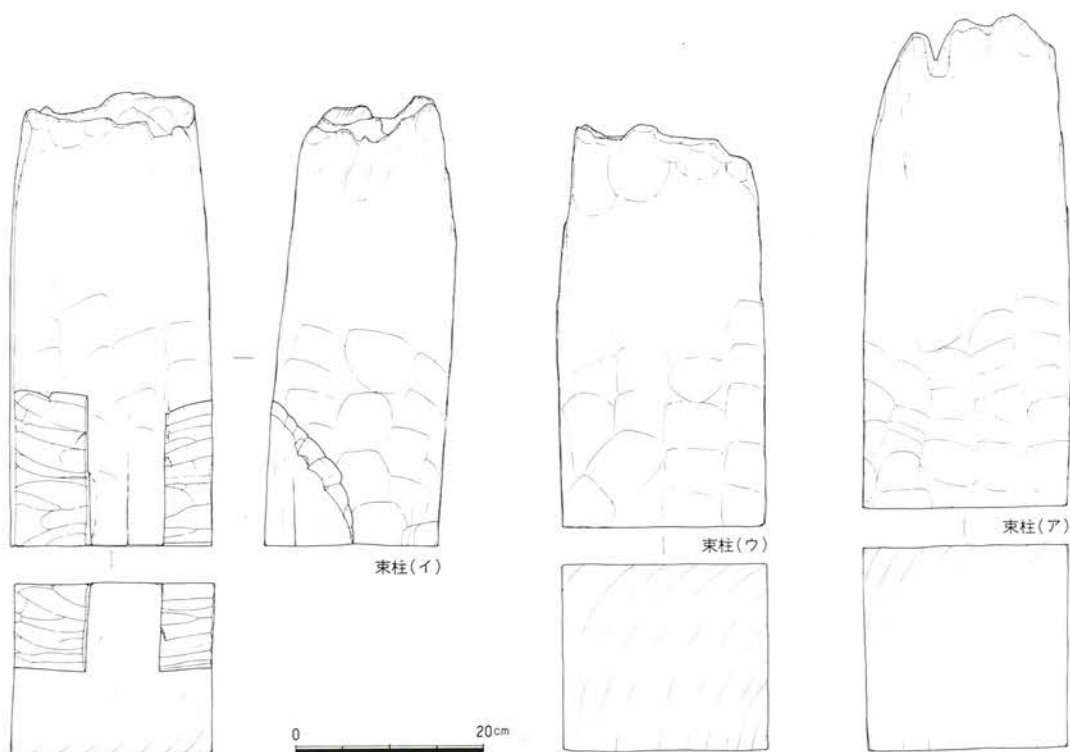


図3 木造基壇束柱

〔延石〕

堂跡の四方を取り囲む掘立柱掘方(エ)・(オ)・(モ)・(ヤ)・(ユ)・(ヨ)の各中間に径30cm大の安山岩が据えられている。掘立柱掘方内に遺存する角柱の柱通りに正確に乗っていることから、木造基壇の地覆の下に入る延石の一部と思われる。延石上面の標高は概ね19.60mである。



表1 薬師堂木造基壇束柱掘方観察表

番号	柱穴の規模			柱根	角柱の規模			礎石	樹皮	番号	柱穴の規模			柱根	角柱の規模			礎石	樹皮
	東西	南北	深さ		東西	南北	残高				東西	南北	深さ		東西	南北	残高		
ア	68	72	55	○	21.9	21.9	53	—	○	ヌ	85	75	38	—	—	—	—	—	—
イ	75	85	60	○	21.6	18.4	48	○	○	ネ	62	88	26	—	—	—	—	—	○
ウ	45	85	63	○	21.9	20	43	○	○	ノ	80	85	56	—	—	—	—	—	—
エ	55	65	52	—	—	—	—	—	○	ハ	70	78	41	—	—	—	—	—	○
オ	70	70	71	○	21	20	45	○	○	ヒ	62	65	47	○	21	18	24	—	○
カ	58	65	39	—	—	—	—	—	○	フ	62	86	47	○	21.8	17	33	—	○
キ	58	85	51	—	—	—	—	—	○	ヘ	88	94	75	—	—	—	—	○	○
ク	55	65	51	—	—	—	—	—	○	ホ	92	98	61	—	—	—	—	—	○
ケ	55	72	60	○	21.8	18.8	35	—	○	マ	78	112	62	○	21	18	40	—	○
コ	90	85	44	—	—	—	—	—	—	ミ	72	106	50	○	21	18	40	—	○
サ	75	85	31	—	—	—	—	—	—	ム	50	86	64	—	—	—	—	—	○
シ	75	74	50	—	—	—	—	—	—	メ	70	70	75	○	18	21	65	—	○
ス	65	60	48	○	18	21	32	—	○	モ	70	96	65	—	—	—	—	—	○
セ	70	98	36	—	—	—	—	—	—	ヤ	82	100	50	—	—	—	—	—	○
ソ	70	75	62	—	—	—	—	—	—	ユ	90	90	47	○	18.8	21	30	△	○
タ	75	80	53	—	—	—	—	○	—	ヨ	75	102	43	—	—	—	—	△	○
チ	80	80	35	—	—	—	—	—	—	ラ	85	92	55	○	18	21	48	—	○
ツ	80	95	49	—	—	—	—	—	—	リ	80	88	45	—	—	—	—	—	○
テ	90	70	50	—	—	—	—	—	○	ル	100	88	52	○	18	21	39	—	○
ト	85	65	50	—	—	—	—	○	—	レ	85	75	62	—	—	—	—	—	○
ナ	78	88	27	—	—	—	—	—	—	ロ	80	78	48	○	18	21	48	—	○
ニ	72	65	56	—	—	—	—	—	—	ワ	85	72	50	—	—	—	—	—	○

○印は現存を示す。数字の単位はcm。△印は根がためを示す。

### 礎石・礎石掘方

堂を四周する掘立柱掘方の内側で、径120～190cm、深さ2～25cmの礎石掘方を検出した。掘方は全部で28ヶ所あり、この内掘方7、12、13、16～18、20～22、25～28に礎石が、掘方3、7、8、10～13、28には根石が遺存する。

礎石掘方7に遺存する礎石以外は、すべて原位置を留めていない。この他に遺構面上に5個礎石が集められた状態で検出したものもある。

礎石に使われた安山岩は概ね径が1m前後の自然石で、柱座面の加工はノミで平らにした程度で

表2 薬師堂礎石掘方観察表

番号	掘方の規模			礎石	根石	備 考	番号	掘方の規模			礎石	根石	備 考
	東西	南北	深さ					東西	南北	深さ			
1	140	160	10	—	—		15	150	150	2	—	—	
2	145	125	10	—	—		16	140	140	18	○	○	礎石横転
3	145	120	15	—	○		17	155	150	4	○	—	礎石横転
4	145	140	20	—	—		18	120	125	8	○	—	礎石横転
5	115	125	10	—	—		19	150	150	3	—	—	
6	105	110	5	—	—		20	120	100	13	—	○	礎石移動
7	105	150	17	○	○	原位置を留める	21	170	140	16	○	○	礎石移動
8	155	140	20	—	○	根石の遺存良好	22	140	130	2	○	—	礎石横転
9	140	120	25	—	—		23	120	120	5	—	—	
10	155	145	20	—	○	根石の遺存良好	24	120	100	10	—	—	
11	135	135	15	—	○		25	120	110	5	—	○	礎石横転
12	142	125	20	○	○	礎石横転	26	145	190	5	—	○	礎石移動
13	145	150	10	○	○	礎石横転	27	115	150	5	—	○	礎石横転
14	160	152	11	—	—		28	120	155	5	○	○	礎石横転

○印は現存を示す。数字の単位はcm。

ある。いずれの礎石も高熱を受けたためか、表面が変色したり剥離している。

検出した礎石掘方から、薬師堂は阿弥陀堂と同じ桁行5間、梁行4間の建物であったことがわかる。しかし原位置を留めている礎石が1ヶ所だけなので、他の遺存する礎石及び掘方からでは堂の正確な規模は把握できない。

#### 階段

薬師堂の正面中央、掘立柱掘方(タ)～(ツ)の東側2400mmの所で、建物の桁行と平行する柱穴(階2・5)を検出した。東西1m、南北約50～60cmの楕円形の平面形を持ち、各柱穴の中には東西方向に長い礎石が遺存する。

この礎石は阿弥陀堂でも検出確認しているもので、堂正面に取り付く階段を支える簷桁(ササラゲタ)を受けるために据えられたものと思われる。

この4つの柱穴の両隅(階2・5)から、東に向ってハの字に開く形で2つの掘立柱掘方(階1・6)がある。階段の最下段が開く形になる。この2つの掘立柱掘方は、階段下の両脇に付く高欄の親柱になるものと思われるが、向拝柱の可能性もある。親柱間の距離は約6300mmである。

堂の中央の間は4550mmであり、基壇の東柱はこの1間を2間割り(各2275mm)にしているが、簷桁はおそらく3間割りにしている縁東に取り付くため1間を3間割り(各1515mm)にしている。

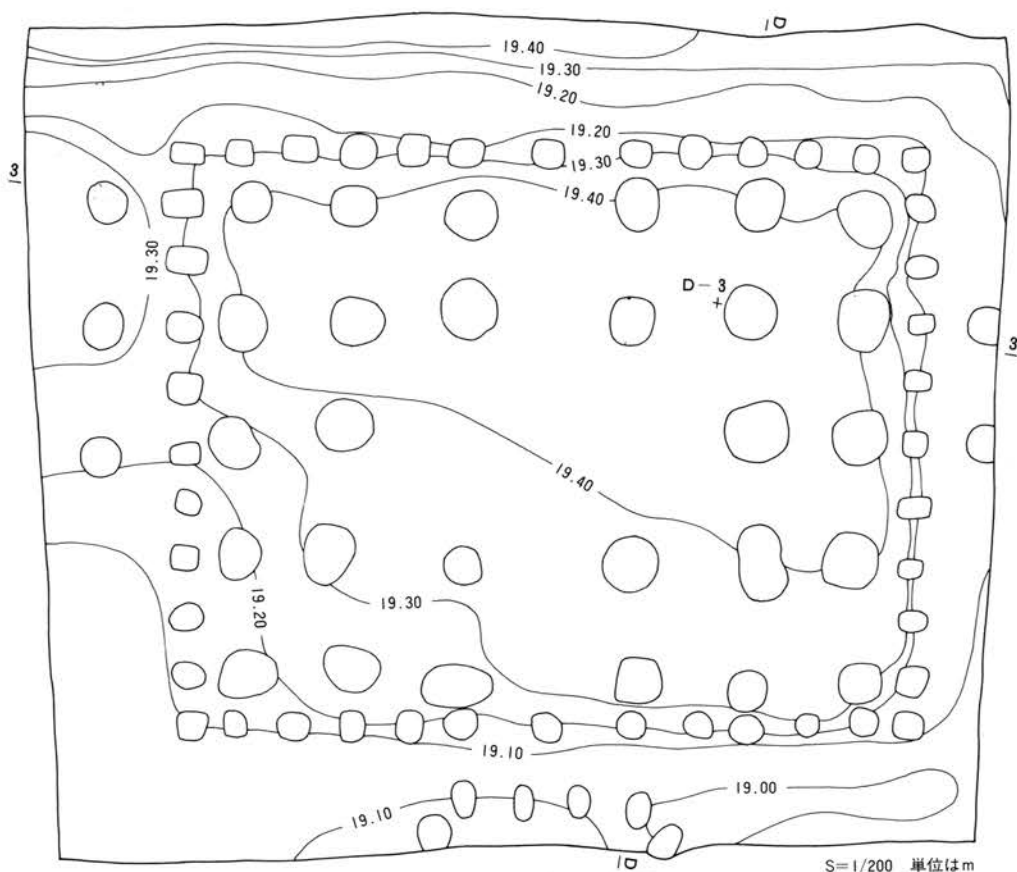


図4 遺構面地形測量図

### 縁 束

堂を取り囲む掘立柱掘方の内、堂の柱筋にあたる(ア)・(イ)・(ク)・(コ)・(ネ)・(ワ)の外側に据えられている、30～50cm程の大きさの礎石（縁1～6）を検出した。

礎石の下には、礎石を据えるための掘方や根石等は認められず、堂本体を支える大型の礎石の据え方と大きく異なっている。この礎石に加わる重量が、比較的小さいことを示している。基壇束柱である掘立柱掘方の外側に位置することや、据え方が簡単なことから、薬師堂周囲を廻る縁を支える縁束の礎石と思われる。堂の外側の柱列から礎石まで2050mmである。

### 雨落ち

堂の背面（西側）で、堂に平行する2列（部分的に3列）に30cm大の安山岩が遺存する石列を検出した。この石列の軸線が、堂に平行していることから、堂の外周を廻る雨落ち溝と思われる。堂の外側の柱列から溝の中軸線まで約3050mmである。溝の構造は、3列の石列から成り中央の石列を両脇の石列より一段低く据えて溝状にしている。堂の正面と両脇の雨落ち溝は、攪乱が激しく石材が散乱している状態である。



## 基壇及び堂の規模

堂本体を支えている礎石を据えていた礎石掘方から、薬師堂の柱間が桁行5間、梁行4間で阿弥陀堂と同じ柱間を持つことがわかった。しかし礎石掘方内に遺存する礎石の大多数は、原位置を留めていないため礎石及び礎石掘方から正確な堂の規模は求められない。

木造基壇東柱の位置は堂そのものの柱位置と密接な関係であることは、二階堂や阿弥陀堂の発掘調査で明らかである。これを利用して堂の平面形を復元すると、東柱の遺存状態が良いために、かなり正確に復元できる。

木造基壇東柱2間で、堂本体の柱1間を基本的に構成しているので、東柱である掘立柱掘方に遺存する角柱から基壇と堂の平面形を復元した。

基壇の桁行方向の全長は、角柱が向い合って遺存する掘立柱掘方(イ)・(ミ)から19130mmである。梁行方向の全長は、掘立柱掘方(ス)・(ロ)に遺存する角柱から15180mmであった。いずれの数値ともに向い合う角柱の芯心を結び計測したものである。

基壇高は、原位置を留めている堂礎石掘方7に遺存する礎石の柱座面と、地覆の下に入る延石上

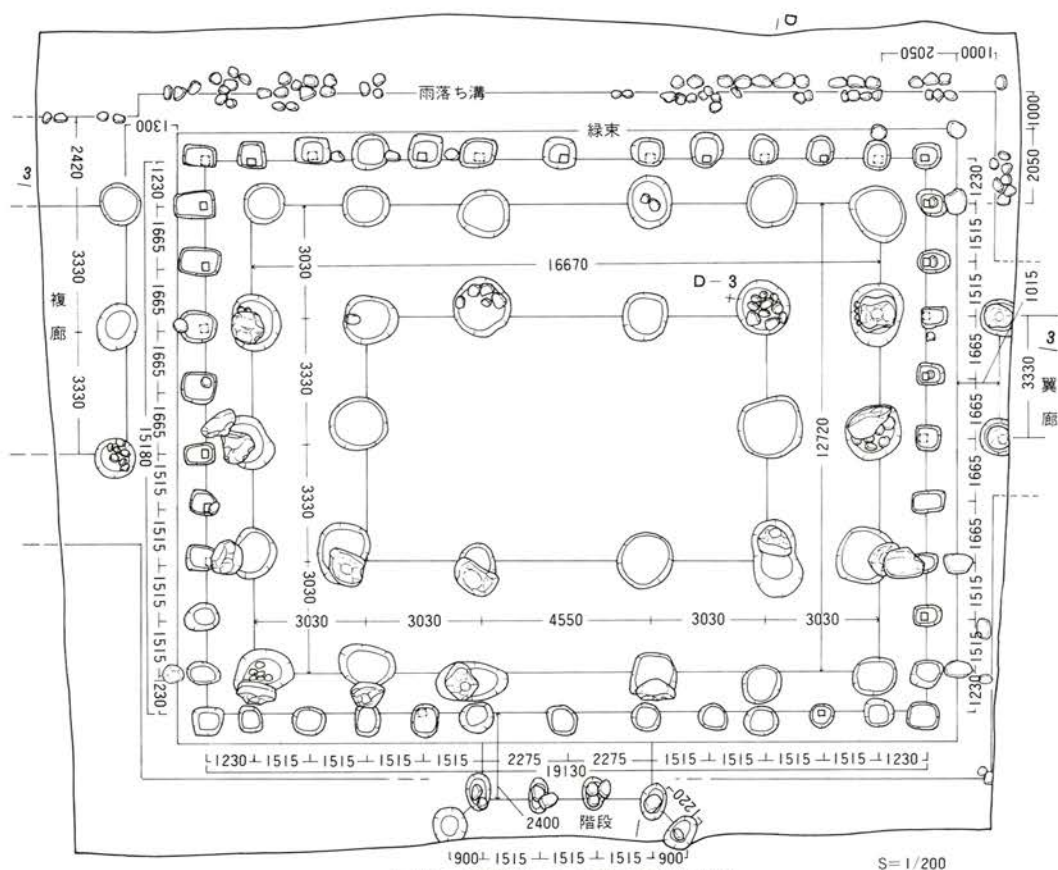


図5 薬師堂及び廊配置模式図



面との標高差より推定した。

柱座面は標高20m、延石上面の標高は概ね 19.60 m であった。このことから基壇高は、約40cm前後に推定できよう。

先に求めた基壇の桁行と梁行方向の数値から、堂本体の各柱間を割り出すと、桁行 5 間の内中央の間が4550mm、両脇 2 間がそれぞれ3030mmとなり、堂の桁行の寸法は 16670 mmとなる。梁行 4 間の内中央寄りの 2 間が各3300mm、両脇 1 間が各3030mmとなり、梁行は12720mmである。

### 3 複 廊

薬師堂の南側で検出した梁行 2 間の建物である。桁行は不明であるが、二階堂と阿弥陀堂を結ぶ複廊から桁行は 5 間と推定する。

この複廊は、二階堂と薬師堂を結ぶ廊下で、薬師堂の南側面の西から数えて 1・2 間目に取り付く形になる。

検出したのは、廊の礎石掘方（廊 1～3）である。柱間は 2 間で各3330mmであり、梁行は6660mmになる。

廊 1 の礎石掘方の西2420mmの所に、複廊の桁行と平行する 1 列の石列を検出した。桁行に平行していることから、この石列は複廊の雨落ち溝の一部であると思われる。

複廊と取り付く薬師堂の縁束との距離は、1300mmである。

### 4 翼 廊

薬師堂の北側で検出した梁行 1 間の建物である。桁行は不明である。

この廊は、薬師堂から北・東へと L 字状に延びる廊下で、薬師堂北側面の西から数えて 2 間目に取り付く形になる。検出したのは根石の上に原位置を留めている礎石が遺存する礎石掘方（廊 4・5）である。2つの礎石ともおそらく火災時に受けた高熱のためか、表面が赤黒く変色している。柱座面では変色の度合により柱の形が痕跡として観察できた。

柱の痕跡の芯心で距離を測ると、翼廊の梁間寸法は3330mmである。この数値は、取り付く薬師堂の基壇東柱の柱間距離に等しい。

表 3 廊及び階段部分観察表

番号	掘方の規模			礎石	根石	備 考
	東西	南北	深さ			
廊1	115	115	5	—	○	
2	110	150	10	—	—	
3	115	110	10	—	—	
4	100	90	10	○	○	原位置を留める
5	100	70	5	○	○	原位置を留める
階1	100	90	47	○	—	掘立
2	100	62	12	○	—	
3	100	50	14	○	—	
4	100	55	14	○	—	
5	100	66	5	—	—	
6	100	65	37	○	—	掘立

○印は現存を示す。数字の単位はcm。

翼廊と取り付く薬師堂の縁束との距離は、1015mmである。礎石柱座面の標高は、廊4、5ともに19.60mで縁の礎石の標高と同等である。このことから翼廊は基壇を持たないとも考えられる。

## 5. 北部地区及び苑池推定地内の試掘

### 北部地区の調査

次年度以後の発掘調査のために、北部地区（B・C・D－2・3・4区）に遺構埋没深度確認用の試掘坑（1～5地点）を5ヶ所設定した。基本的に5ヶ所とも土層の堆積状況は、同じ様相を呈している。

表土である腐食土の下に旧水田耕作土の灰色粘質土層が厚く堆積している。この下には、宝永年間の富士山の火山灰が全地点で観察された。火山灰層から遺構面までは、20～40cm程の灰色粘土層で覆われている。

#### 〔1地点〕

地表から遺構面まで約135cmである。遺構面の標高は20.45mである。遺構面は厚い土丹による地業面である。少量の瓦が出土した。

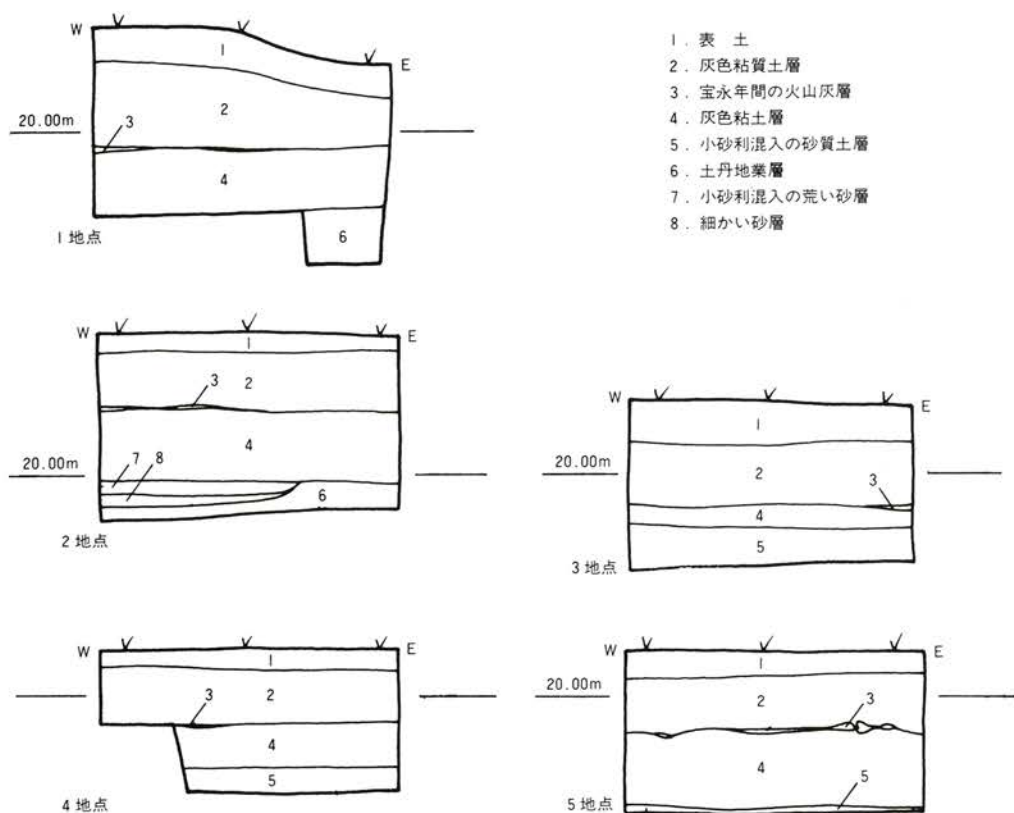


図6 北部地区試掘土層図

〔2 地点〕

地表から遺構面まで約 125 cm である。遺構面の標高は 20 m である。遺構面は土丹による地業面で、一部に細かい砂利を含むレンズ状の堆積が観察された。位置的に遺水が推定されている所ではあるが、狭い範囲なので確認はしていない。少量の瓦が出土した。

〔3 地点〕

地表から遺構面まで約 115 cm である。遺構面の標高は 19.35 m である。遺構面は黒色土（地山）である。少量の瓦が出土した。

〔4 地点〕

地表から遺構面まで約 100 cm である。遺構面の標高は 19.30 m である。遺構面は黒色土（地山）である。少量の瓦が出土した。

〔5 地点〕

地表から遺構面まで約 110 cm である。遺構面の標高は 19.20 m である。遺構面は黒色土（地山）である。コンテナ箱分の瓦が出土した。

**苑地推定地内の調査**

56・57年度の試掘調査、59・60年度の発掘調査で部分的に苑池の確認が行われてきた。今回の調査は、苑池の広がりをも大まかに把握するために行われた。

苑池の陸と海の判断は、昨年度想定した苑池の水位（18.65m）を基準にした。

二階堂の正面にあたる E・F 地点は、遺構面が想定水位よりも高く、この正面部分は苑池に向って大きく張り出していたことが推定できる。また薬師堂の正面の A 地点や山ぎわの B・G・L 地点も、想定水位より遺構面が高く苑池の外であることが推定できよう。

C・D・H・I・J・K・N・M・O 地点は、遺構面の標高が想定水位より低く（17.70～18.40 m）苑池内であると推定できる。

P・Q 地点は、遺構面の標高で比べると想定水位より低く（17.90～18.00 m）苑池内の標高であるが、遺構面に黒色土と土丹による地業を行っている。苑池内の遺構面（池底）とは異なり苑池外の遺構面（陸部）と思われる。

この地点が苑池の範囲外ということならば中ノ島の位置をも含めて苑池の南側の広がりを慎重に検討する必要がある。

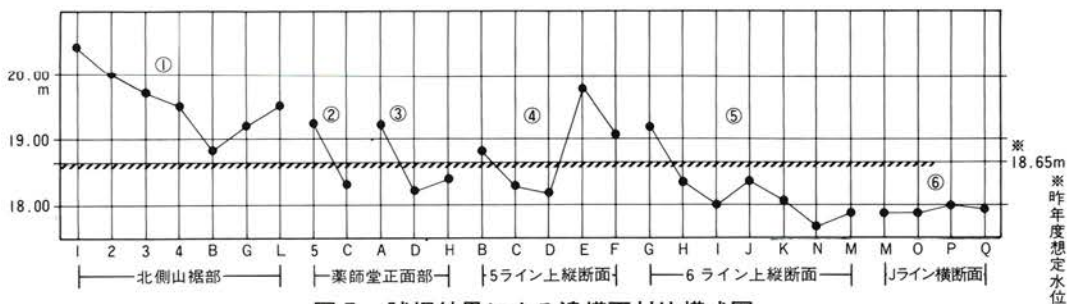


図7 試掘結果による遺構面対比模式図

## 第4章 出土した遺物

今年度の発掘調査によって出土した遺物は主として瓦類である。その他に船載・国産陶磁器、金属製品、石製品、かわらけ、古代遺物等が少量ではあるが出土している。遺物の出土状況としては、堂の建てられた面上及び包含層中に散乱した状態、又は礎石掘り方の覆土上部にまき込まれたような状態であって層位的や遺構に伴ったような区分はなしえない状況であった。また各試掘地点から出土した遺物のうち、瓦類に関しては表4・5に本調査区の出土瓦類とともに数値を示した。以下に遺物の種別ごとにその概要を記すことにする。

### 1. 瓦 類

瓦類は調査区全体から破片数にして4600点以上出土したが、特に遺構に伴ったような状況は得られなかった。その種類には鎧瓦・宇瓦・男瓦・女瓦・鬼瓦等があり、女瓦中に人名・寺銘・記号を押印したものが認められた。

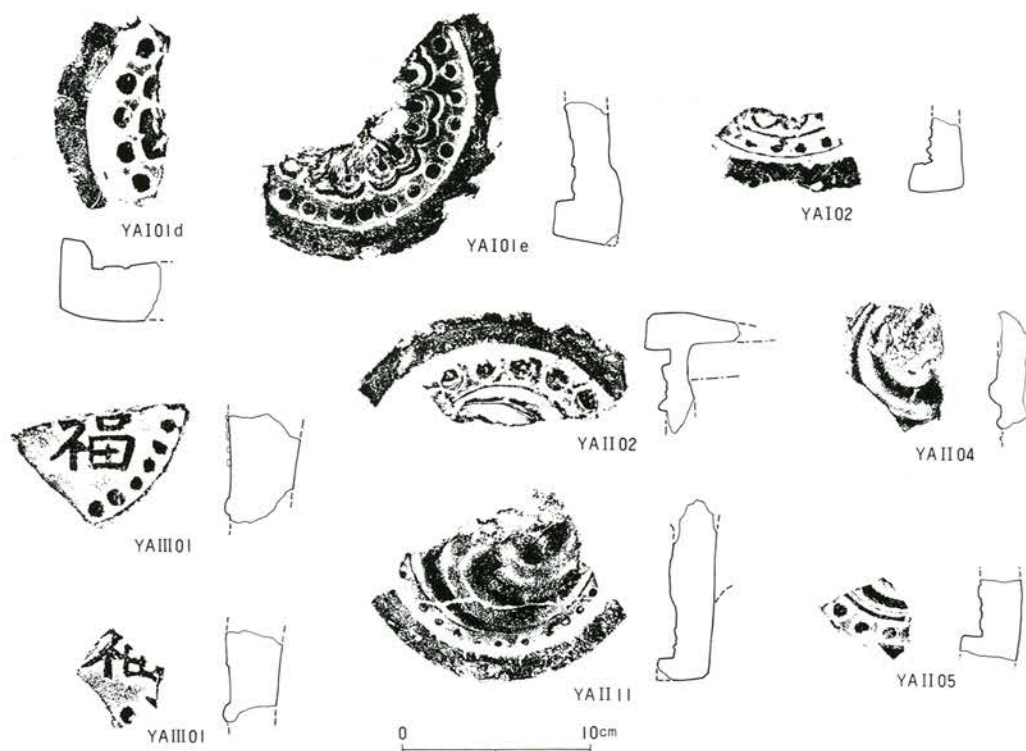


図8 鎧瓦



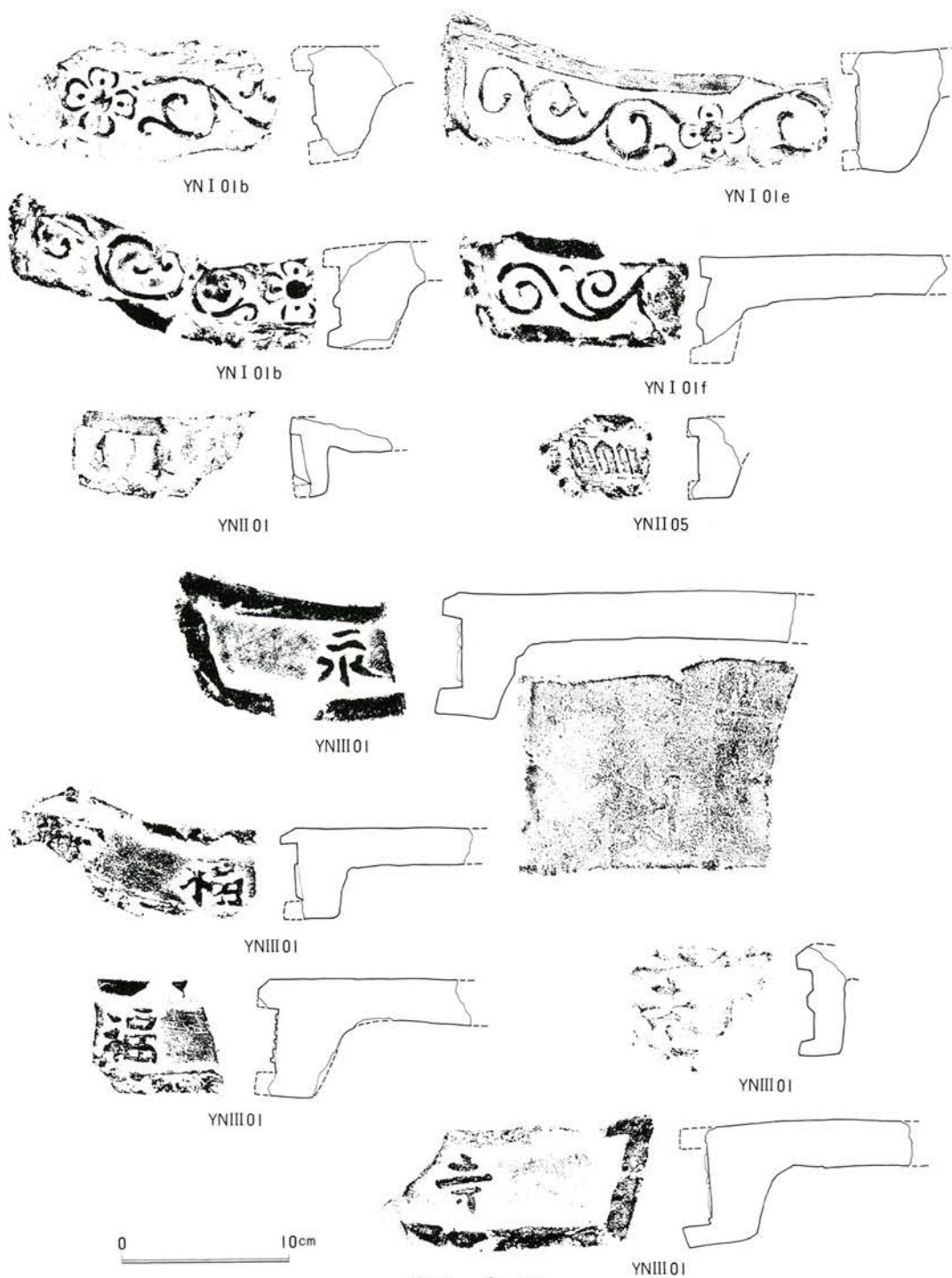


图9 字瓦

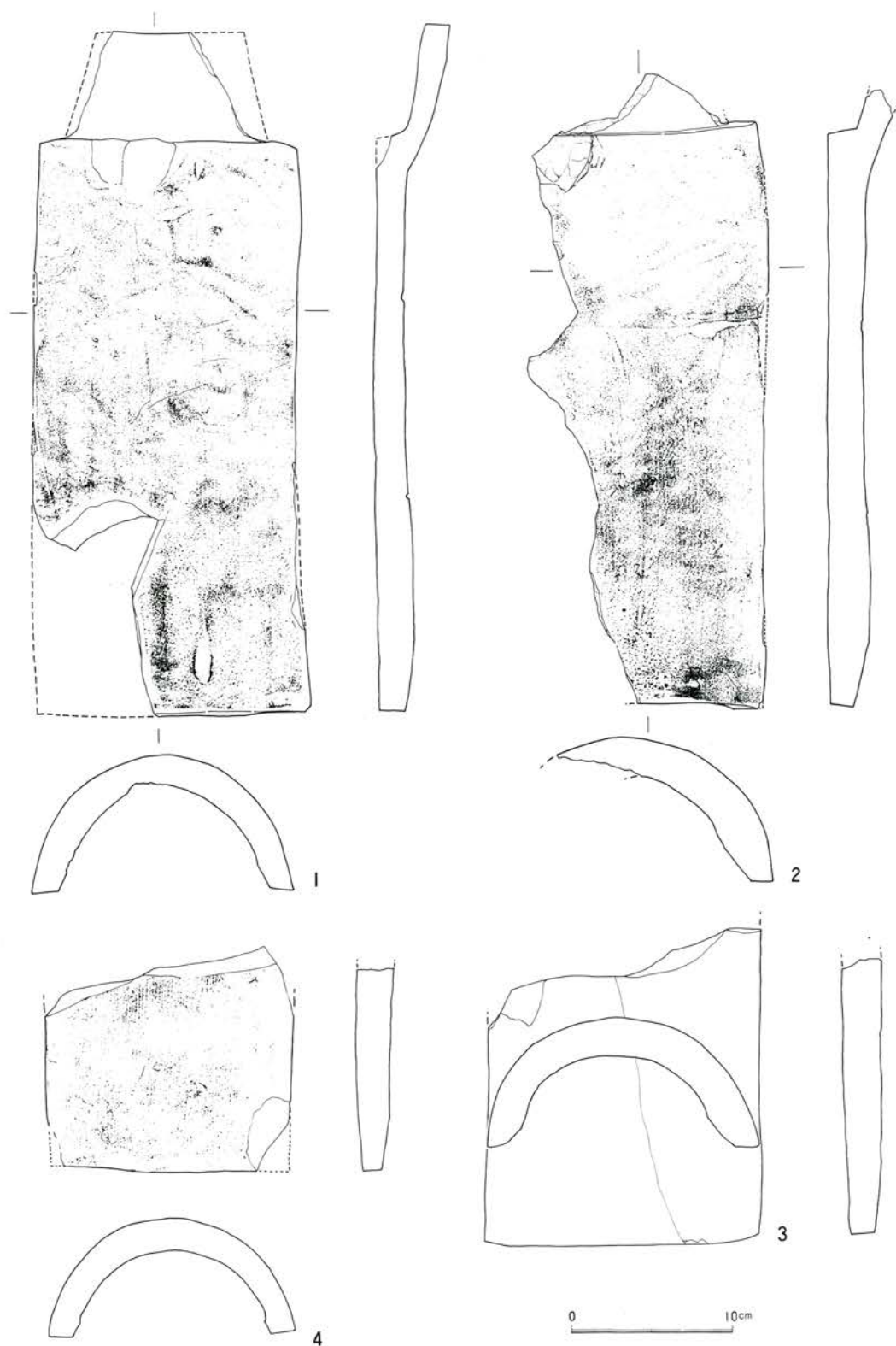


図10 男瓦A種

# 鑑（軒丸）瓦、宇（軒平）瓦（図8～10）

本遺跡の軒先瓦については、すでに昨年度の概要報告において各型式別の資料を提示し、その特徴<sup>註1</sup>を述べた。本概要では新しく確認された型式の特徴を主体に報告しておきたい。

今年度出土した軒先瓦類は、総計61点を数えるが、内訳は表4に示したとおり鑑瓦が7型式8種類の22点、宇瓦が5型式8種の39点であり、鑑瓦のY A I 02・II 11は今年度新しく検出された型式である。

Y A I 02 複弁蓮花文鑑瓦。外区から内区内縁にかけての小破片で、中房は欠失している。弁

表4 鑑瓦・宇瓦・文字瓦出土一覧表

種 類	出土地点	試 掘 地 点					面上及び 包含層	計	比 率 (%)	備 考
		1	5	C	T	A				
鑑 瓦	Y A I 01 d						1	1	4.5	
	e						5	5	22.8	
	I 02						1	1	4.5	新型式
	II 02						2	2	9.1	
	04						1	1	4.5	
	05						1	1	4.5	
	11				1			1	4.5	新型式
	III 01				1		1	2	9.1	
	型式不明	1			1		6	8	36.5	Y A I 01・II 02(不明)を5点含
	小 計				3		19	22	100	
宇 瓦	Y N I 01 a						1	1	2.6	
	b						5	5	12.8	
	e					1		1	2.6	
	f						1	1	2.6	
	I 01 梨崎					1	12	13	33.3	
	II 10						1	1	2.6	
	03		1				1	2	5.1	
	05						1	1	2.6	
	III 01						14	14	35.8	異范があり、細分可能
	小 計		1			2	36	39	100	
文 字 瓦	Y M I 04 c			1				1	4	「文長」
	I 梨崎		1				1	2	8	Y A を1点含む
	II 01						4	4	16	「文暦二年永福寺」銘
	02 a						1	1	4	「永福寺」銘
	03 a						1	1	4	〃
	b						1	1	4	〃
	c						4	4	16	〃
	04						2	2	8	〃
	05						1	1	4	〃
	06						1	1	4	〃
	07		1					1	4	〃
	II 梨崎					2	4	6	24	〃
	小 計		2	1		2	20	25	100	

区には輪郭線で複弁が表現され、内外区を細い界線で分ける。珠文は弁端と弁間にほぼ対応して巡らす。灰褐色を呈し、焼成やや軟質、胎土に砂を含む精良。本型式は小破片であり、あるいはYAⅣ01の異范品の可能性もある。

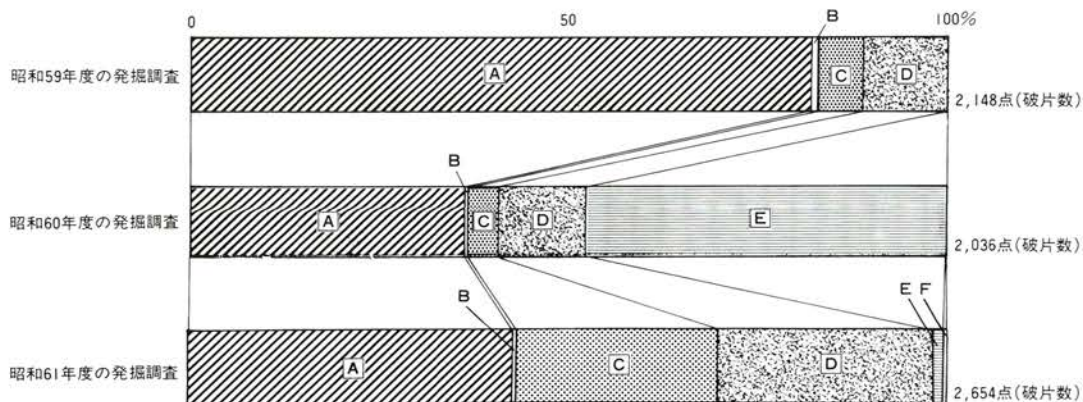
YAⅡ11 左廻り巴文鐙瓦。巴頭部の先端は丸味をおび、頭部から胴太気味に尾部につづく。尾の末端は隣りの尾部と接することはない。珠文は小さく、間隔も不揃いである。瓦当裏面及び外周は丁寧なナデ調整を施している。瓦当面径約16cm。表面黒灰色、内部灰白色を呈し(くすべ焼風)、焼成は良好、胎土に粗砂を多く含む。瓦当面に黒色砂粒のハナレ砂が顕著にみられる。

以上が新しく検出した軒先瓦の主な特徴である。今年度の本調査区における軒先瓦の出土傾向は、創建期主要瓦に比定されるYAⅠ01・YNⅠ01が数量的には少ないながらも、それぞれ軒先瓦の約50%に当たり、両者の占める割合が高いと言える。しかも、宇瓦においては「永福寺」銘のYNⅢ01

表5 女瓦・男瓦出土一覧表

出土地点		面上及 包含層	試掘地点																計	比率 (%)
種 類			1	2	3	4	5	A	C	D	E	F	I	J	K	M	O	P		
女	A	1141	10	15	32	34	106	87	39	2	30	11		16		1		5	1528	44.2
	B	10	1		2	1	1				2								17	0.4
	C	701			12	3	8	6	18		3	4		12			1		768	22.1
	D	765	9	3	21	13	80		48	4	6	6		50			1		1006	29.0
	E	32					4							1	1		1		39	1.1
	F	6					1												7	0.2
瓦	不 明	53	1		6	1	6	3	34										104	3.0
	小 計	2707	21	18	73	52	205	96	139	6	41	21		79	1	1	3	5	3466	100
男	A	652	8	5	29	12	39	13	22		19	4	1	15					819	75.7
	B	209		4	4	4	7	5	14		7			3		5			263	24.3
瓦	C	1																	1	
	小 計	862	8	9	33	16	46	18	36		26	4	1	18		5			1082	100
合 計		3569	29	27	106	66	251	114	175	6	67	25	1	97	1	6	3	5	4548	

表6 昭和59～61年度における女瓦の型式別百分比



※今年度の数値は本調査区で出土した破片数で、しかも型式不明をのぞく。



14点を数え、宇瓦の絶対数が少ないながらも、その型式別出土点数にかたよりが見られたのが今年度の特徴である。さらに今年度の出土傾向はY A II 06や、Y N II 06などの鎌倉後期的要素の強い瓦が多く出土した昨年度の場合と異なっていると言えようし、こうした傾向は後述するとおり、女瓦においても見られるのであって、いずれについても興味あることのひとつと言えよう。

### 男瓦 (図10・11)

男瓦は破片数にして1082点余り出土した。昨年度までと同様、男瓦は胎土の良し悪しによってA・B 2種に分類し、さらに東海地方窯産の製品をC種として、表5にA～C種の出土数を示した。

男瓦はすべて玉縁付のものでA種の例(図10-1～3)では1が全長39cm、男瓦部長34.1cm、男瓦部径16cmをはかる。3は男瓦部径15cmをはかる小形の例である。B種の例(図11)では2が



図11 男瓦B種(1～3)、東海地方窯系男瓦(4)

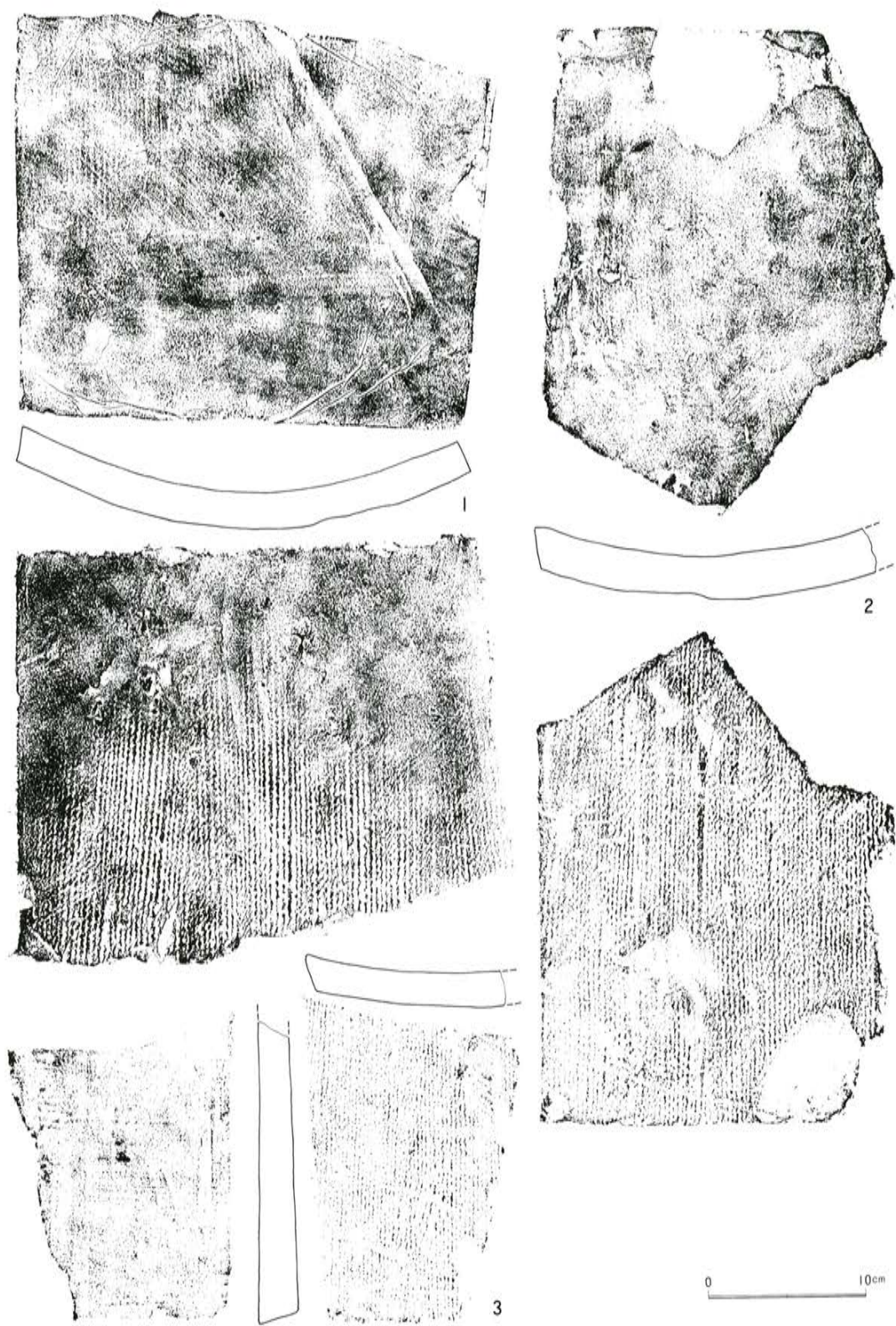


图12 女瓦A類



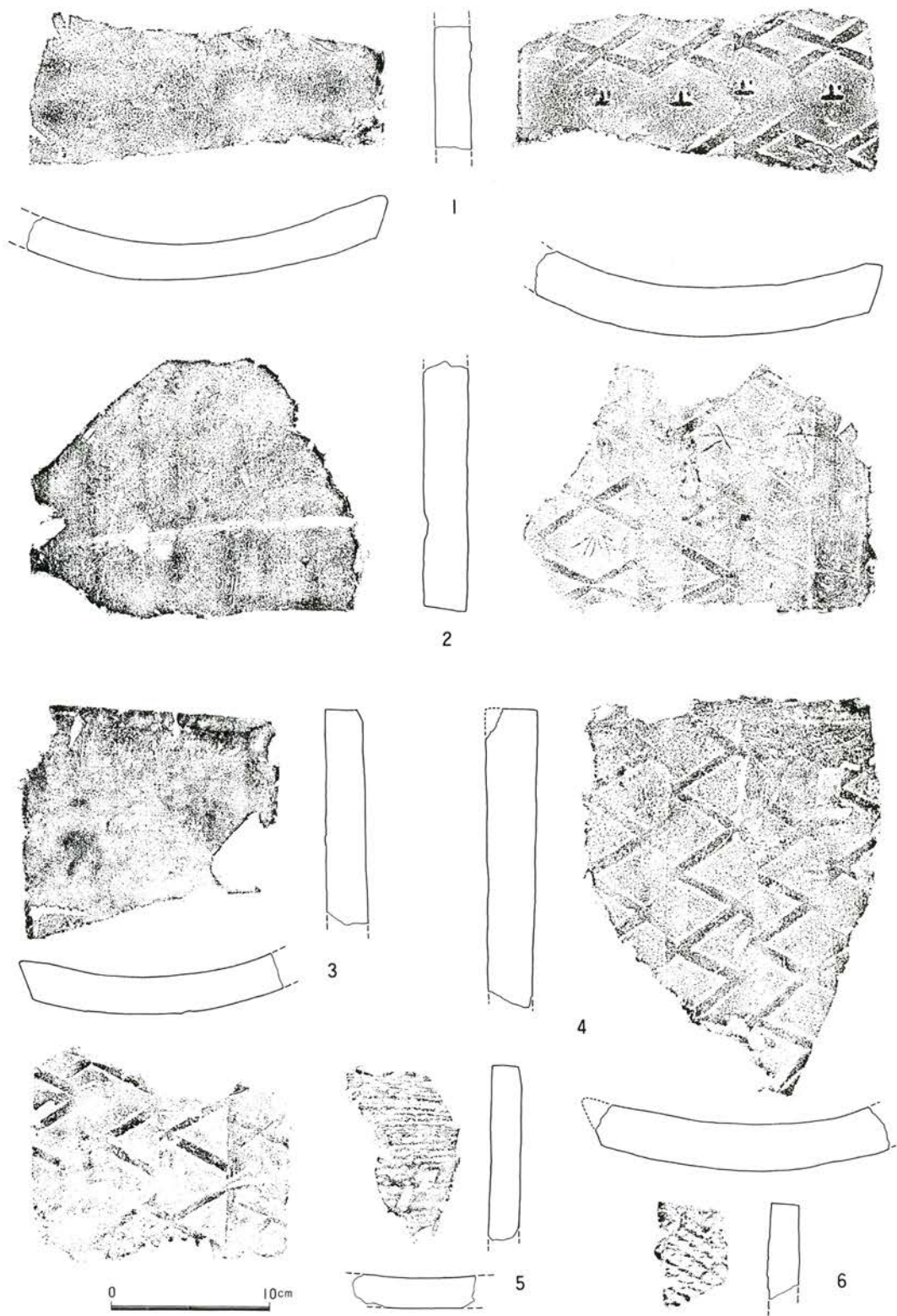


图13 女瓦B類・C類

男瓦部径16cmをはかる。4は東海地方窯産の男瓦で1点出土している。

### 女瓦（図12～16）

今年度出土した女瓦は、破片数にして3470点余りを数え、女瓦A～F類の6種類が認められた。その型式別出土数の内訳は表5に示したとおりであり、また昭和59～61年度の発掘調査で出土した女瓦における型式別百分率比は表6に示すとおりである。

女瓦については、すでに昨年度までの概要報告において、女瓦A～E類の比較的多くの資料を図示して各型式の特徴を既に指摘した。今年度の調査では、女瓦F類（東海地方窯系）の良好な資料が6点得られたのでここに報告しておきたい。

女瓦F類（図15・16）：<sup>註2</sup>東海地方の窯で焼成されたと考えられる女瓦である。焼成は堅緻で陶質

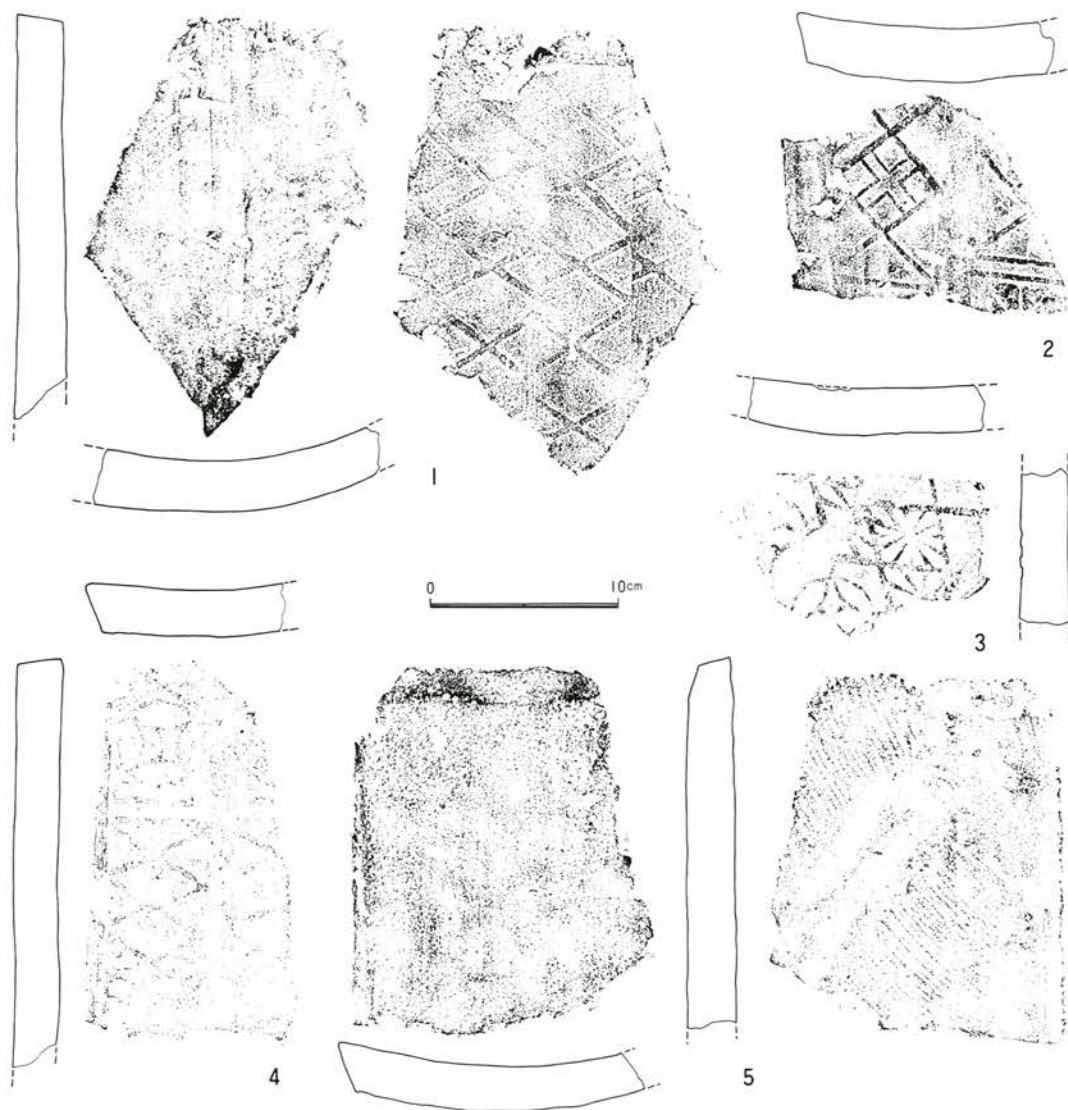


図14 女瓦D類



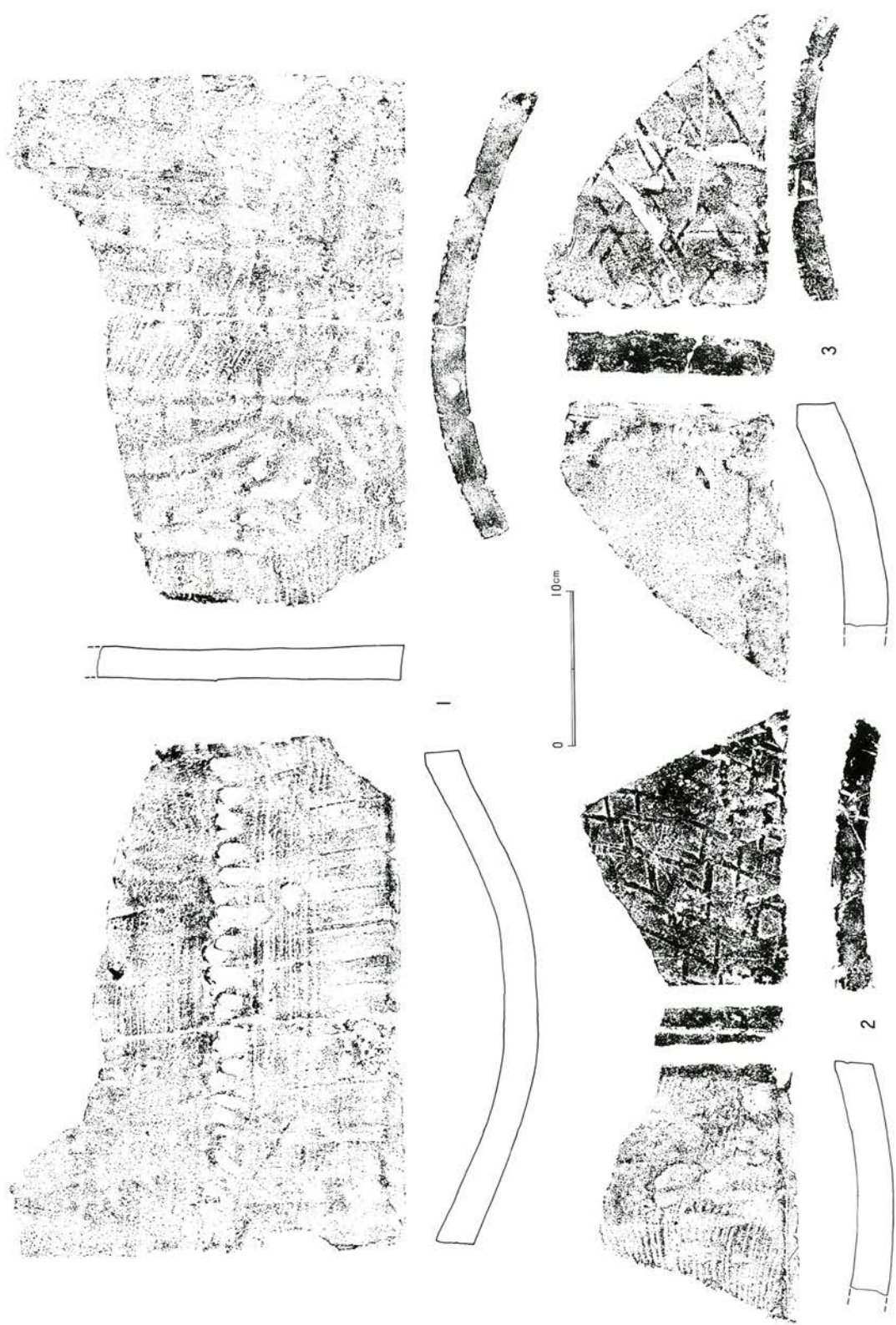


図15 女瓦F類(東海地方窯系)

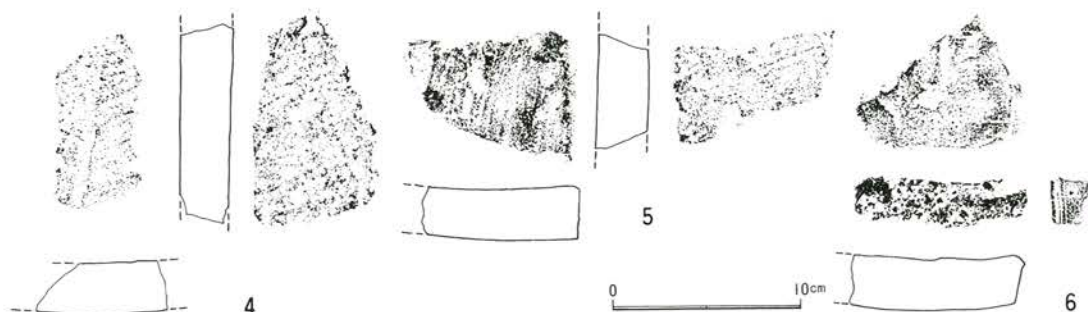


図16 女瓦F類（東海地方窯系）

の製品である。色調は赤灰～茶灰色を呈し、胎土には石粒（長石か）を多く含み、この石粒がとけて発泡したものもある。1の例で見ると、広端部幅31.8cmをはかる。厚さは2.0cm程の薄手のものから2.7cm前後の例までである。凸面は若干の糸切り痕を残す。叩き目には横位または斜位の縄叩き目を施す例(図16-5・6)、太目の正格子に近い叩き目を縦位に施す例(図15-1)、斜格子に近い叩き目を縦位または斜位に施した例(図15-2・3)がある。叩き目は全体的に浅く叩かれている。凹面には糸切り痕を認めるが、布目圧痕を残したものは皆無である。また、凹面の広端・狭端部の付近に縦位に走る細板状の圧痕を残す例が認められた。側面は1回のヘラ削りで調整しており、凹面側の角をナデによって丸く仕上げたものが多い。端縁はヘラ削りを施した例が多い。

このタイプの女瓦では、凹凸面に多量の砂粒（石粒を多く含む）が付着している。凸面の砂粒は叩きによって打ち込まれており、叩きを施す前に表面に撒いたと思われる。この石粒を含む砂が発泡してガラス質になった例もある。

以上が女瓦F類（東海地方窯系）の主な特徴である。今年度の本調査区における女瓦の出土傾向は、創建期に比定される縄目叩きのA類が女瓦全体の43%を占め、高い割合を示し、細かな斜格子の叩きによるB類は10点しか出土しておらず、昨年度までと同様の傾向にある反面、第II期（寛元<sup>註3</sup>・宝治年間の修理瓦）に比定される斜格子中に文字・記号を有するC類、「永福寺」銘の押印を持つD類が合せて55%以上とかなり高い出土比率を示した。しかも昨年度の調査で女瓦全体の50%近くを占めた女瓦E類が、今年度の調査では1%強しか出土しない事実は先述した軒先瓦類の出土傾向とともに共通した要素が認められた。

#### 文字・記号瓦（図17）

今回出土した文字・記号瓦は、文字瓦25点、記号瓦5点、合計30点である。文字瓦は8型式で10種類を数える。文字瓦の型式別出土数の内訳は表4に示したとおりであり、各印の主な特徴については「第4章で文字瓦の型式分類」において各型式の拓影及び解説（表7）を行っているのでそれを参照されたい。

YMI04cは女瓦A類の凹面に「文長」を押印したものである。YMI01～07は女瓦D類の凹面に押印したもので、01は「文暦二年永福寺」銘を、02～07は「永福寺」銘を押印している。8～12は工房印と思われる記号を押捺した製品である。8～11はいずれも女瓦の端面に竹管状の「○」印



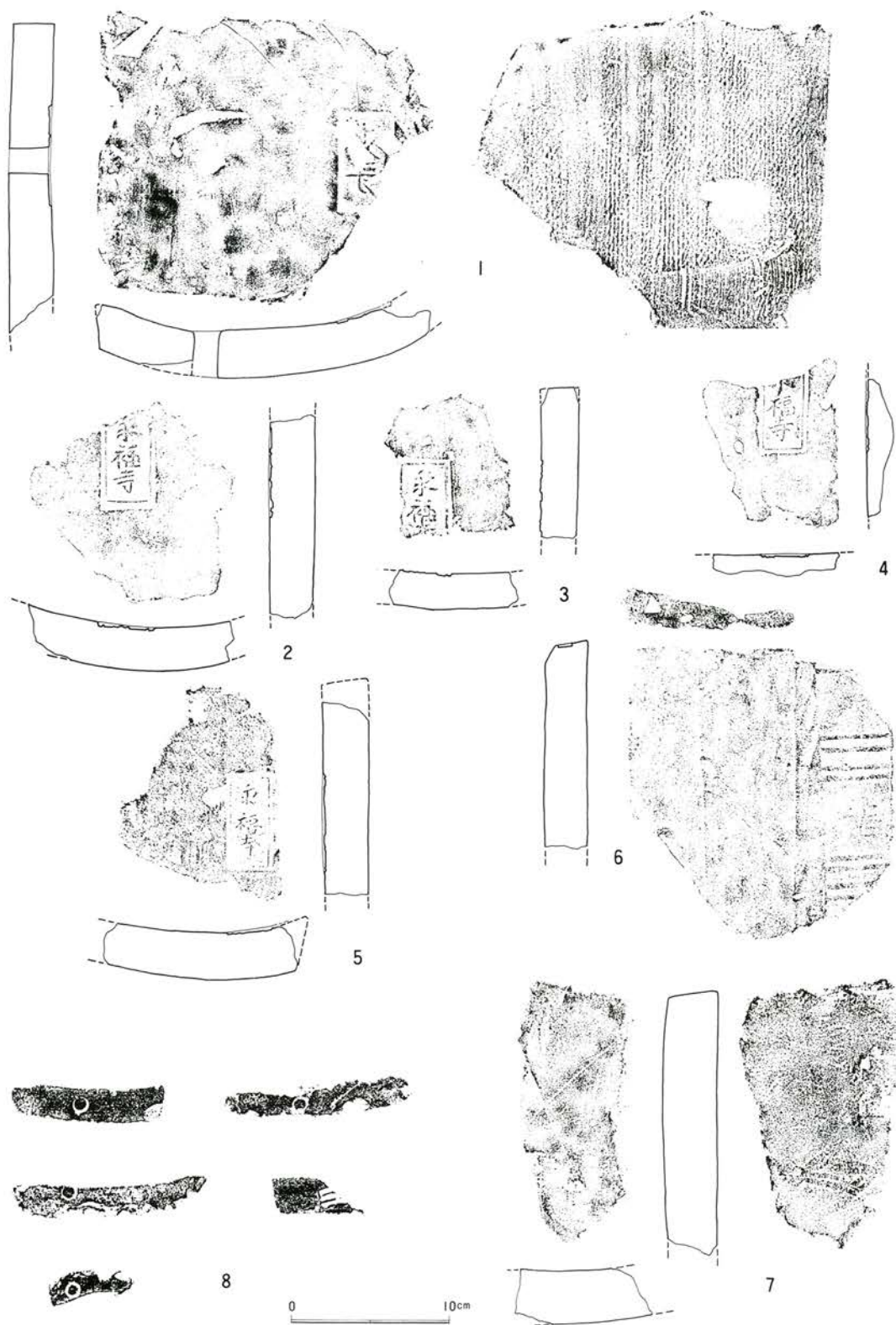


図17 文字瓦・記号瓦

が押印されている。12は女瓦の端面に「目」印を押したものである。

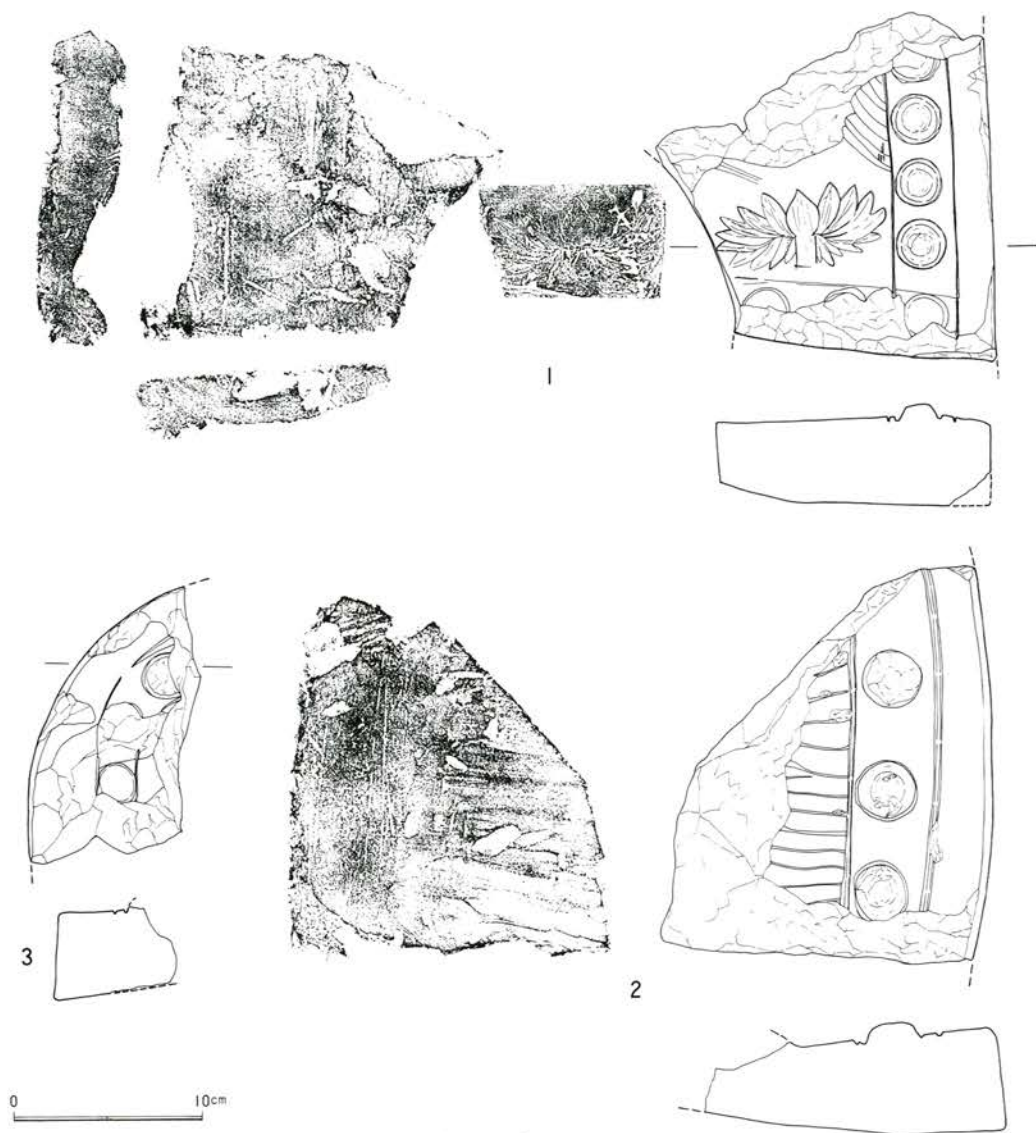


図18 鬼瓦

### 鬼瓦 (図18)

鬼瓦の破片は合計6点出土する。このうちの3点を図示した。6点の鬼瓦片はいずれも本調査区の包含層及び堂跡面上より出土した。胎土・焼成は創建期に比定する瓦類(YA・YN I 01や女瓦A類等)と共通した特徴を持つ製品である。1は鬼瓦右下隅部分の破片である。珠文帯は幅3.4cmでこの中に直径2cmの珠文を配する。珠文帯の内側には戯画が描かれている。この戯画は、蓮の花の側面観を表現したもので、先端の尖った鋭利なへら状工具によって描かれたと思われる。2は鬼瓦右端部分の破片で、厚さは6cmで珠文は直径約3cmである。3は鬼瓦左上部分の破片、珠文は直径2cmである。2・3の裏面は丁寧な指ナデによって調整される。



## 2 中世の遺物（図19、図版15－1）

### かわらけ

1は手捏ね成形。口径7.0cm、器高2.0cmを測る。強いナデにより口端面を作り、体部外面にかけて強いナデを廻らせている。赤灰色を呈し、雲母を多く含む精良な胎土で、焼成も良好である。調査区南東壁より出土。

2は手捏ね成形。口径7.1cm、器高2.2cmを測る。口端部は丸味を帯び、体部外面のナデが弱く稜線はほとんど残らない。体部の立ち上がりはきつく、狭底の器形。明赤灰色で、精良な胎土、焼成は極めて良好で堅緻である。礎石掘方4付近より出土。

3は手捏ね成形。口径8.1cm、器高2.3cmを測る。強いナデによって口端に凹線を廻らせている。体部もナデによって手捏ね部との間に稜線を持つ。赤灰色を呈し、精良な胎土で、焼成は良好。調査区南西隅より出土。

4は手捏ね成形。口径8.5cm。器高2.0cmを測る。体部外面は軽い横ナデが施こされて、口縁は弱い縁带状である。赤灰色を呈し、雲母粒を含む精良な胎土で、焼成は良好。調査区南より出土。

5は手捏ね成形。口径8.6cm。器高2.1cmを測る。口端部は丸味を帯び、体部外面の稜線は明瞭に認められない。明赤灰色を呈し、雲母粒を多く含む精良な胎土で、焼成は良好である。礎石掘方12付近より出土。

6は手捏ね成形。口径9.2cm。器高1.8cmを測る。口端部は丸味を帯び、体部外面の稜線はほとんど残らない。赤灰色を呈し、石英・雲母を含む精良な胎土で、焼成は良好である。礎石掘方12付近より出土。

7は手捏ね成形。口径9.4cm。器高1.8cmを測る。広い底部で、立ち上がりが浅く、厚みを帯びた器形。口縁部を強くナデ、縁带状の口縁。体部にも強いナデを廻らせ、稜線が強く示される。淡赤灰色を呈し、雲母粒を多く含む精良な胎土。焼成は良好。調査区西隅より出土。

8は手捏ね成形。口径9.4cm。器高2.3cmを測る。縁带状の口端部を有し、体部外面の稜線は弱い。淡赤灰色を呈し、細かい石英、雲母を含む精良な胎土で、焼成は良好。調査区南より出土。

9は手捏ね成形。口径9.2cm、器高1.8cmを測る。丸味を帯び、端部にむかって薄くなる口縁を持つ。体部外面の稜線はほとんど認められない。赤灰色を呈し、細かい石英、雲母を比較的多く含む精良な胎土で、焼成は良好。複廊礎石掘方2付近で出土。

10は手捏ね成形。口径8.8cm、器高1.9cmを測る。口端部は玉縁状、体部外面に強いナデを廻らせる。赤灰色を呈し、少量の石英、雲母を含むきめ細かい胎土で、焼成は良好。礎石掘方12付近で出土。

11は手捏ね成形。口径13.7cm、器高3.2cmを測る。縁带状の口端部を有し、強いナデで凹線状になる。体部外面の稜線はほとんど認められない。明灰褐色を呈し、細かい雲母、石英を多く含む精

良な胎土。焼成は良好。薬師堂北東隅より出土。

12は手捏ね成形。口径15.2cm、器高 3.6 cmを測る。口端部は内彎気味に立ち上がり、体部外面の稜線は、指頭圧痕との境で明瞭に認められる。明灰褐色を呈し、石英、雲母、針状物質を含む細かい胎土。焼成は良好。薬師堂北西隅付近より出土。

13はロクロ成形。口径6.7cm、器高2.4cmを測る。底径が小さく、体部の立ち上がりは直線的で、口端部では外反する。底部は糸切りされ、スノコ痕が見られる。赤灰色を呈し、焼成は良好。口縁部にタールの付着が見られる。攪乱された掘立柱掘方(う)より出土。

14はロクロ成形。口径7.0cm、器高2.1cmを測る。器形は13に類似するが、内面見込みのナデが強く、底部は薄い。濃赤灰色を呈し、細かい気泡が多く入る荒い素地で、針状物質を含む。焼成は良好。13と同様に口縁部にタールの付着が見られる。やはり灯明皿として用いられたものと思われる。礎石掘方10と11の中間付近より出土。

15はロクロ成形。口径7.3cm、器高2.1cmを測る。体部から口縁部まで内彎気味にゆるやかに立ち上がる整った器形。底部は欠損部分が多いが、糸切り痕が認められる。赤灰色を呈し、石英、雲母、針状物質を多く含む粗い胎土。焼成は良好。礎石掘方12付近より出土。

1～12のかわりけはすべて手捏ね成形である。遺構に供ったものはなく面上の出土であるが概ね13世紀代の年代が与えられる。13～15はロクロ成形である。13、14と比べて15がやや古い様相を呈す。14世紀後半～15世紀前半の年代が与えられる。

#### 青 磁

16は蓮弁文の碗の口縁部である。淡い青緑色の釉で、素地は精良な灰白色土。焼成は良好である。蓮弁の幅は比較的小さく鑄も浅い。調査区西側壁より出土。

少片のため口径など委細は不明であるが、14世紀代のものと考えられる。

#### 常 滑

17、18とも大甕の口縁部である。頸部をくの字に外反させて、口端を上下に拡張して縁帯を作り、強い横ナデを廻らせている。

17は茶褐色を呈し、長石粒を含む細かくしまった胎土。焼成は良好。北部地区試掘掘1地点出土。

18は暗灰色を呈す。2mm大の石英、長石を多く含み、気泡の多い荒い素地。焼成は良好。17ほど縁帯は直立しない。調査区南西隅より出土。

口縁、頸部の形態から、ともに14世紀末～15世紀初頭のものと考えられる。

#### 香 炉

19は口径14.2cm大の瓦質器の断片である。胎土は灰白色精良で、瓦器碗のそれと類似する。表面はよく研磨され黒色で光沢を持つ。器形、大きさから香炉と判断する。鐔状に外に突出した口縁をもち、体部に帯状の三列のスタンプによる雷文を廻らせ、さらに珠文状の装飾を配している。珠文状の文様は復元36個を数える。また底部は欠損しているが、残存部分の観察から三足が付くものと考えられる。礎石掘方12付近より出土。なおこれに極めて類似した香炉は、近年の鎌倉市内の発掘

注1

調査では、推定藤内定員邸跡遺跡（鎌倉市新中央公民館用地内）の出土例があげられる。

出土例が少なく委細は不明であるが、概ね15世紀初頭と考えられる。

## 砥石

20は明赤褐色を呈する厚さ5mm程の硬質の泥岩製。台形が欠損したもので、両面に研磨が認められる。砥面は平滑であり、仕上砥か中砥に用いられたものと考えられる。北部地区試掘1地点出土。

## 金属製品

21は長さ24.4cm、中央部で一辺1.5cmを測る鉄製角釘である。礎石掘方17と23の間遺構面より出土。ほぼ同様のものが58年度の調査でも出土している。

注1.（推定）藤内定員邸跡遺跡 1985年2月鎌倉市教育委員会

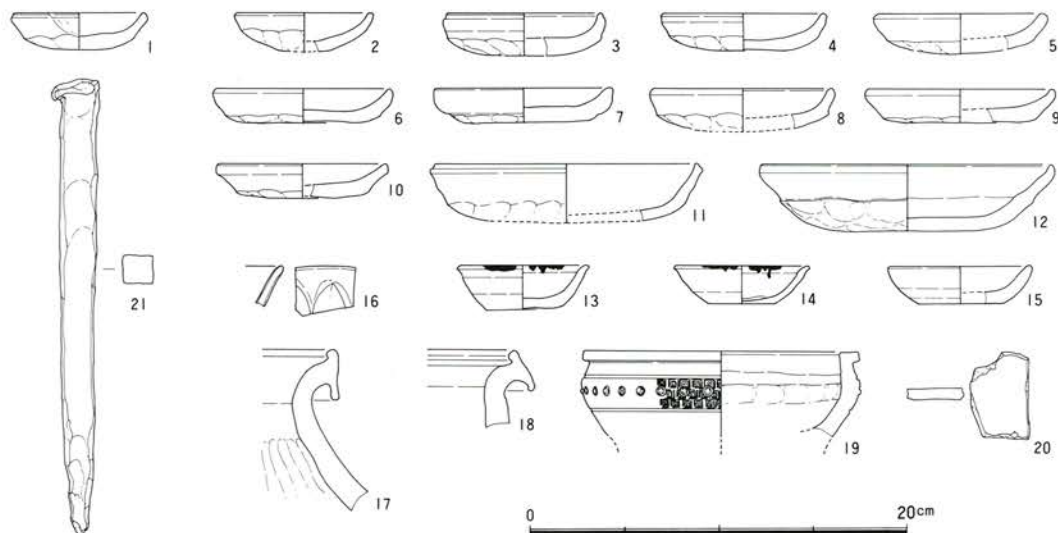


図19 中世の遺物

## 3. 古代の遺物（図20、図版15-2）

1は壺口縁 $\frac{1}{4}$ 部片である。複合口縁を呈す。外面は細かいハケを施した後ナデ。内面はヘラミガキで調整する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに淡赤灰色を呈する。復原口径は14.8cmを測る。

2は甕の口縁 $\frac{1}{4}$ 部片である。外面に浅い凹線状の凹を持つ。色調は暗赤灰色を呈する。復原口径は17.8cmを測る。

3は甕の底部片である。胎土に細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は外面黒灰色、内面暗灰色を呈する。底径は5.2cmを測る。



4は頸部から口縁部を欠損する甕である。体部は丸みを帯び、底部は上げ底となる。外面は底部まで赤彩される。底径は4.4cmを測る。

5は甕の口縁から胴部にかけての破片である。口縁は大きく外反し、くの字に屈曲する頸部と丸みの強い体部を持つ。外面はナデ、内面は板状工具によるナデで調整している。

6は高杯の脚部片である。杯部と脚裾部を欠損する。脚柱部は中央部でややふくらみを持つ。外面は縦方向のヘラナデの後に赤彩されている。内面はヘラナデで調整している。胎土に砂粒が多いが、焼成は良好である。色調は明るい赤灰色を呈する。

7は杯部の口縁から5体部にかけて欠損する高杯である。杯部の内外面、脚部外面に赤彩を施す。杯部は外面に稜を有し外反するものと思われる。脚部は中央部でややふくらみを持つ。脚柱部から脚裾部へ強く屈曲する。内面は強いヘラケズリ。胎土に細かい雲母が多くみられる。脚裾部径は13cmを測る。

8は須恵器長頸壺の底片である。内外面ともヨコナデ調整で、砂粒の動きからロクロの回転方向は右廻りであることがわかる。焼成は良好で青灰色を呈する。

1の壺口縁部片は五領期、8の長頸壺は奈良時代後半のものであるが、概ね他の遺物は、和泉期のものと推定する。

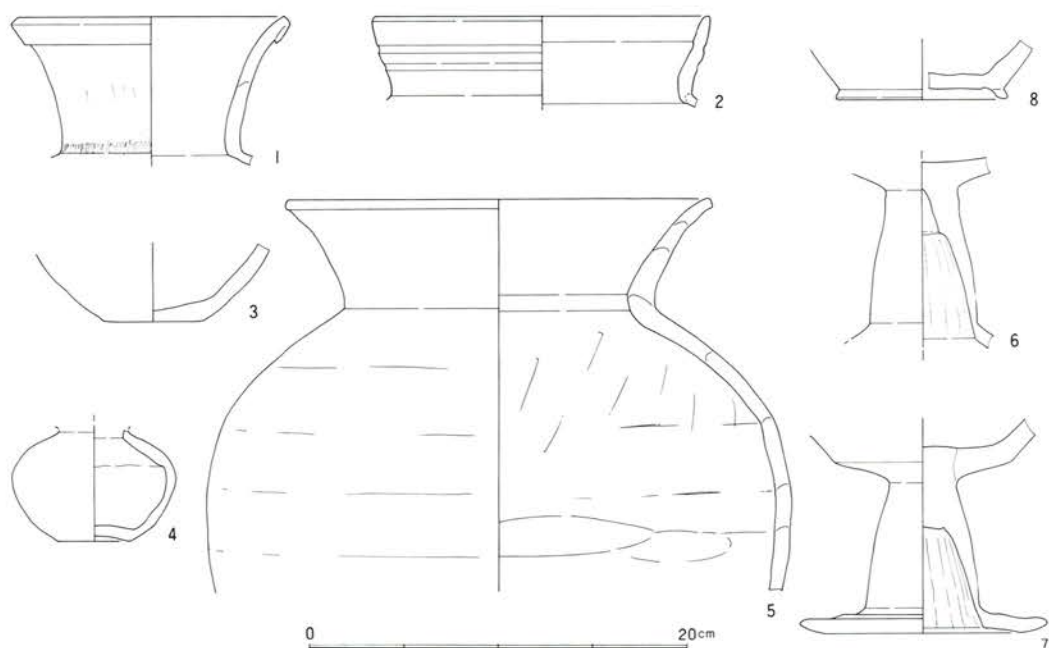


図20 古代の遺物

#### 4. その他の遺物

本来は中世の遺物で取り扱う遺物と思われるが、石材ということでその他の遺物として項目を改めた。

束石が2点、葛石が1点、地覆石が1点の計4点出土している。すべて鎌倉石（凝灰岩）の切り石である。遺構面上の出土で原位置は留めていないが、おそらく壇上積基壇に使われた石材である。

### 束石

1の寸法は、高さ20cm、見付幅19.3cm、奥行13cmであり、断面はT字形を有する。2の寸法は、高さ20cm、見付幅19cm、奥行19cmであり、断面は1と同じくT字形となる。2点とも上下にノミ痕を残す。

### 地覆石

寸法は長さ73cm、奥行24cm、厚さ15cmである。表面の風化の違いから、羽目石の厚さ（5寸）が観察できた。

### 葛石

寸法は長さ85cm、幅34cm、厚さ13cmである。表面と側面が高熱のために赤黒く変色している所から、束石と羽目石の上に乗る葛石と思われる。表面と側面はノミで平らに削られる。

羽目石の出土こそなかったけれども、束石、葛石、地覆石の寸法から、使用された時期は不明であるが永福寺の堂か廊で使われたであろう壇上積基壇は、薬師堂の木造基壇同様ごく低いものだったと推察できる。

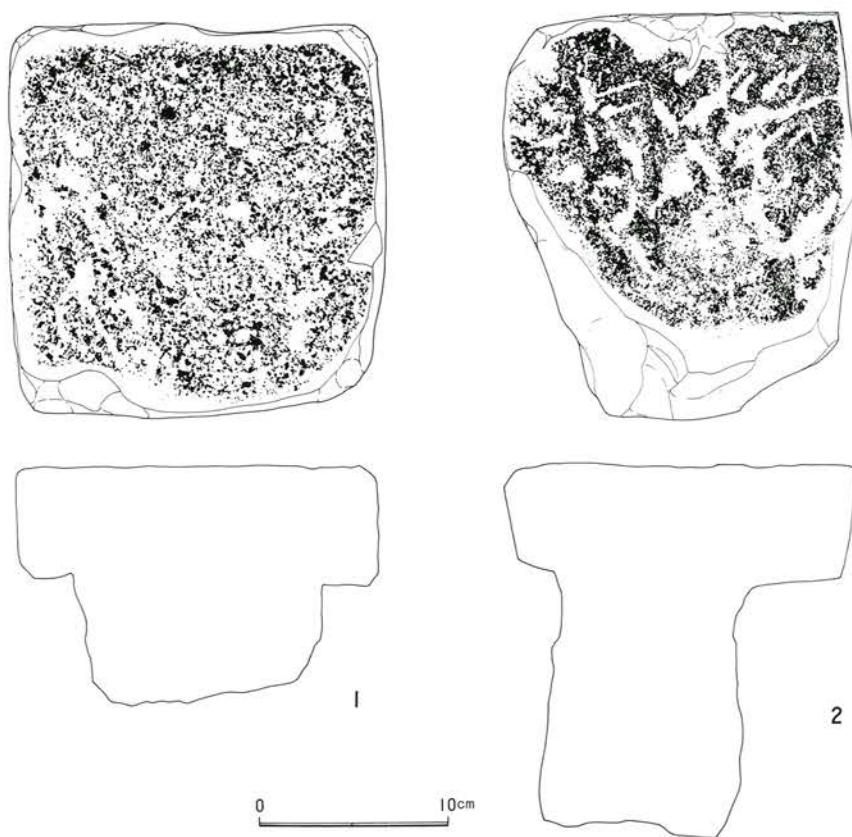


図21 壇上積基壇束石

## 第4章 文字瓦の型式分類

永福寺跡から人名・寺銘押印の文字瓦が出土することは、古く住田正一氏が紹介し、以後、しばしば紹介されてきた。昭和56年度～61年度の発掘調査では、16型式25種の文字瓦が出土したが、このうち、YMI05、YMI07やYMI01～04の6型式8種を除いたものが、人名・寺銘押印の文字瓦である。型式ごとの文字瓦の解説は表7に示した。

**文字瓦の型式設定** 永福寺跡から出土した文字瓦については、すでに昭和56年度～今年度の発掘調査概報において、年度ごとに主な特徴を紹介してきた。今年度は、6年次にわたる調査のまとめの形で、今まで出土した文字瓦の各型式について報告することにしたい。また昭和56年度以前に採集された資料に関しては、原則として検討の対象からはずすことにした。

記述に際して使用した文字瓦の型式番号は、YMの頭文字を付し、次にI～IIIのアラビア数字で、I 人名系、II 寺銘系、III その他、に区別して、各々の系統で新型式と確認した順に若い番号を与えたものである。それにつづく小文字のアルファベットは同一型式の異種の表示を意味している。また本寺跡の発掘調査は、次年度以降も継続的に実施されるため、新たな型式の増加も予想されるので、次年度以降の概要では、前記概要とその記述内容の重複をでき得る限り避けるために、新しく確認された点についての報告を主体とする。最終的な型式の提示は本報告に委ねることとし、ここにお断わりしておきたい。

**文字瓦の定義** 今年度までの発掘調査で出土した文字瓦のうち、YMIの人名系文字瓦はYMI02が銘瓦YAII02aの瓦当裏面に押印され、YAII05がYAII02aの瓦当裏面にへら書きしたものであるが、それ以外のYMI01～YMI04は、いずれも、女瓦A類の凹面に押印によって文字を陽刻している。その印は幅2.4～3.5cm、長さは4～6.5cm以上の長方形のスタンプである。YMIの寺銘系文字瓦はYMI07が女瓦の凸面に叩き目で表現したものであるが、それ以外のYMI01～YMI06は、いずれも女瓦D類の凹面に、押印によって文字を陽刻する。その印は、幅3～3.9cm、長さは5.4～7cmの長方形のスタンプである。YMIのその他としたものは、女瓦C類の凸面に、×状の斜格子目中に文字・花押様のものを配した叩き目を有する。その押型具は、幅5.5cm～6.6cm以上の細長い叩き板と考えられる。

YMI01～04の人名押印瓦と同じ印を押した文字瓦は、鶴岡八幡宮<sup>註1</sup>、市内扇ヶ谷<sup>註2</sup>の泉ヶ谷奥、島山屋敷跡<sup>註3</sup>でも出土している。YMI01～07の寺銘押印の文字瓦は、長勝寺遺跡<sup>註4</sup>、市内扇ヶ谷<sup>註5</sup>の泉ヶ谷奥、向荏柄遺跡<sup>註6</sup>からも出土している。YMI01～04の女瓦D類は鶴岡八幡宮<sup>註7</sup>で出土している。これらは単に印が共通するばかりでなく、それぞれの製作技術、焼成、胎土なども共通し同じ工房で製作された製品と判断できる。しかし、永福寺跡以外で出土するこれらの文字瓦に関しては、鶴岡八幡宮の場合は評価しにくい、それ以外の遺跡については一部転用もしくは何らかの経路で流用さ



表7 文字瓦一覧表

番号	型式番号	記載文字	記載法、記載用具	記載対象・方向	備 考
1	Y M I 01	宗 清	押印 印長5.1cm 印幅2.4cm	女瓦A・凹面・縦位	印の上端は隅丸方形を呈し、印幅がやや狭くなる。
2	Y M I 02	守 光	押印 印長4.3cm 印幅2.5cm	女瓦A・凹面・縦位	
3	"	守 光	押印 印長2.5cm以上 印幅2.5cm	Y A II 02 a ・ 裏面・縦位	2 と同印と思われる。
4	Y M I 03	宗 俊	押印 印長5.3cm以上 印幅3.2cm	女瓦A・凹面・縦位	上・下は同印によるものか？ 註9・10文献に拓影有
5	Y M I 04 a	文 長	押印 印長4.0cm以上 印幅3.3cm	女瓦A・凹面・縦位	「長」の第1・3・4画が第2画と離れる。
6	b	文 長	押印 印長4.3cm以上 印幅3.0cm以上	女瓦A・凹面・縦位	「長」の第1・3画が第2画に各々くつく。
7	c	文 長	押印 印長6.2cm 印幅3.4cm	女瓦A・凹面・縦位	bより「長」の第4画と第5画が離れ、しかも文字が太い。
8	d	文 長	押印 印長6.5cm以上 印幅3.5cm	女瓦A・凹面・縦位	印長が大きく、文字も太い。 「長」の第6画と終画がくつつく
9	Y M I 05	守 □	竪書 先端の尖った 道具	Y A II 02 a 裏面・縦位	瓦当裏面を指ナデで平らに調整した後、中央に刻字。
10	Y M II 01	文暦二年 永 福 寺	押印 印長5.4cm 印幅2.7cm以上	女瓦D・凹面・縦位	文暦二年は嘉禎元年(1235)の事であり惣門上棟の年に当る。
11	Y M II 02 a	永 福 寺	押印 印長7.0cm 印幅3.9cm	女瓦D・凹面・縦位	「寺」の第3・4画がbより短くしかも文字の彫りが深く細い。
12	b	永 福 寺	押印 印長7.0cm 印幅3.9cm	女瓦D・凹面・縦位	aより印の彫りが浅く、しかも太くなる。
13	Y M II 03 a	永 福 寺	押印 印長6.2cm 印幅2.7cm	女瓦D・凹面・縦位	a～cの文字は良く似ている。
14	b	永 福 寺	押印 印長5.6cm以上 印幅3.0cm	女瓦D・凹面・縦位	a・cより印幅が短く、太目になる。
15	c	永 福 寺	押印 印長5.2cm以上 印幅3.0cm	女瓦D・凹面・縦位	「寺」字の右側に文字様(?)ものが彫られている。
16	Y M II 04	永 福 寺	押印 印長6.2cm以上 印幅3.5cm	女瓦D・凹面・縦位	文字はY M II 02 bに似る。
17	Y M II 05	永 福 寺	押印 印長6.0cm 印幅2.5cm	女瓦D・凹面・縦位	内枠が彫られていない。「寺」の字が大きく太い。
18	Y M II 06	永 福 寺	押印 印長4.8cm以上 印幅2.9cm以上	女瓦D・凹面・縦位	「永」字の第3画と第4画との間に余分な横画が入る。
19	Y M II 07	永 福 寺	叩き 長さ17cm以上 幅 4.2cm	女瓦D・凸面・縦位	凸面に叩き板にて文字を型押しする。

21	Y M III 01 a	<sup>?</sup> 花押・大	叩き 長さ4.5cm以上 幅 5.5cm以上	女瓦C・凸面・縦位	「大」は裏文字。花押状の文様が同一原体にある。
22	b	大	叩き 長さ4.6cm 幅 5.7cm以上	女瓦C・凸面・縦位	「大」は裏文字、ただし花押状の文様はみられない。
23	02 a	十	叩き 長さ4.4cm以上 幅 5.5cm以上	女瓦C・凸面・縦位	「十」の文字が全体に太く表現されている。
24	b	+・ <sup>?</sup> 少	叩き 長さ5.1cm 幅 6.6cm以上	女瓦C・凸面・縦位	「十」の文字が細く、横長に表現される。「少」の様な文字有。
25	03	上	叩き 長さ6.3cm 幅 5.8cm以上	女瓦C・凸面・縦位	「上」の文字の第一画が点状に表現される。
26	04	<sup>?</sup> 花押	叩き 長さ5.7cm 幅 5.8cm以上	女瓦C・凸面・縦位	花押状で01 a とは異なる。

れたものと判断したい。

**文字瓦の製作年代** 軒先瓦や女瓦の検討を通じて製作年代を想定してみたい。Y M I 01～04の人名瓦は女瓦A類に伴うものであり、第I期軒先瓦(Y A I 01・Y N I 01の主要瓦)と対応関係にあるため、永福寺創建期の製品と考えられる。次にY M II 01～06の寺銘瓦は女瓦D類に押印されたものであり、Y A III 01・Y N III 01に代表される寺銘系軒先瓦との対応関係が考えられ、第II期(寛元・宝治年間の修造)に際し使用されたものと考えられる。さらにY M III 01～04の女瓦C類もこの時期の製品と推定される。

**人名押印の文字瓦** 人名押印の文字瓦に関しては、1915(大正4)年、高橋健自氏により「古瓦に現われたる文字」<sup>註8</sup>ではじめて紹介された。その後、1918(大正7)年に住田正一氏は「鎌倉古瓦考」<sup>註9</sup>を発表した。その中で「宗俊」、「国元」、「守光」、「文長」などの人名押印や「永福寺」の寺銘押印をもつ文字瓦を紹介している。特に人名の押印文字については「是等の文字は恐らく瓦工の人名なるべし……殊に鎌倉時代の刀鍛冶が刻銘せし事及び其氏名が例へば「長光」「正宗」の如く相似せるより類推を進むるも寄進者の姓氏を記せるに非ずべし」という見解を述べ、これらの押印文字が瓦工名を表示していると想定された。

その後、竹沢嘉範氏は「鎌倉市内出土の人名瓦」<sup>註10</sup>において住田正一氏の「瓦工名説」に対して否定的な意見を述べた。すなわち、竹沢氏は鎌倉時代から南北朝時代の瓦工は、その地位が低く番匠大工の掌握下にあったこと、瓦大工が独立したのは、14C末に法隆寺で活躍した橘吉重以後であること、「石清水祠官系図」(『続群書類従』)に「宗清」「宗俊」など類似した人名が見えることなどを根拠に、瓦工名とするより有力御家人等の寄進者か、社寺関係者の名とする方が妥当であると考えた。



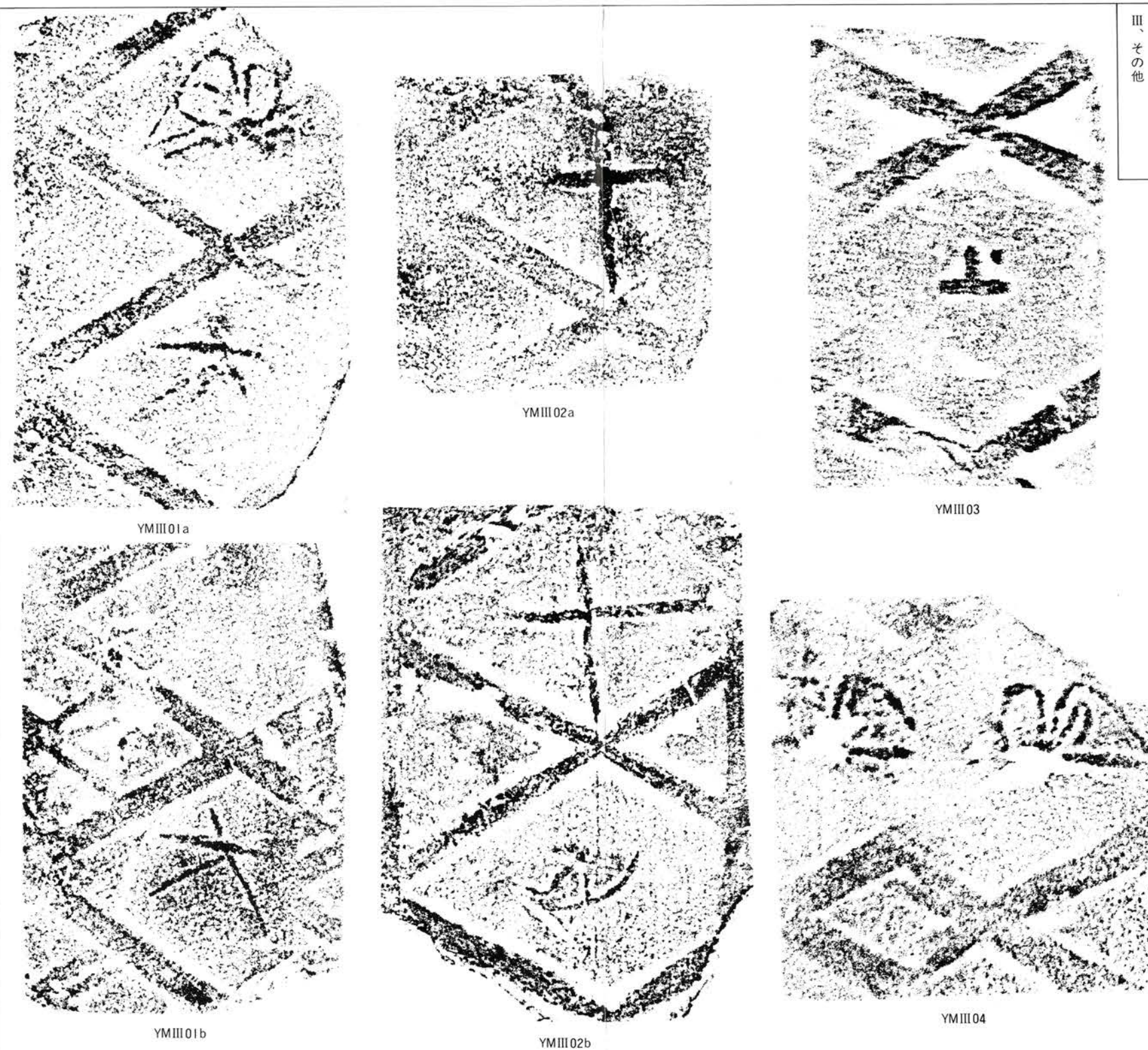
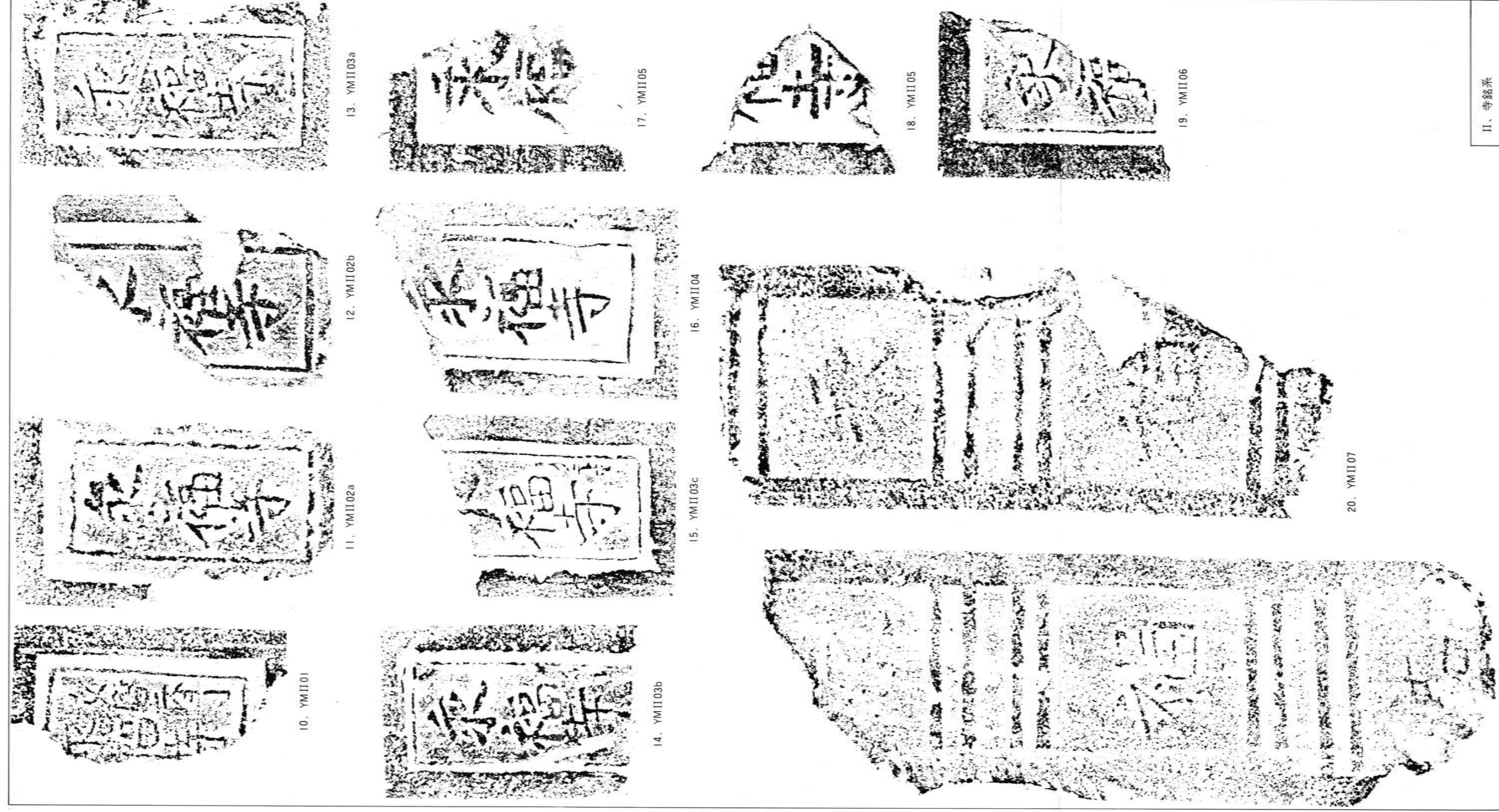


図22 文字瓦(1)







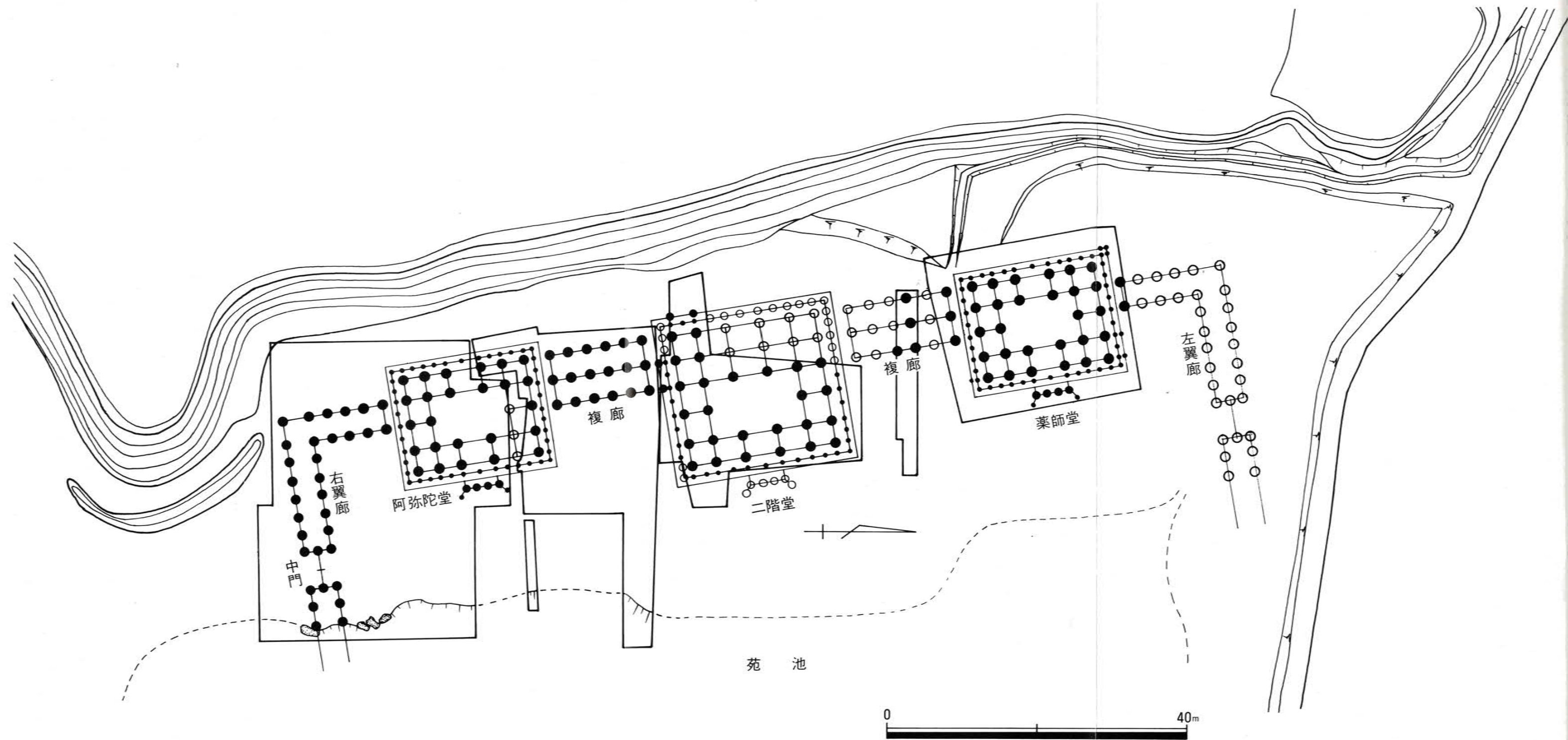


図24 今年度までに確認した建物跡模式図(●印は確認、復元した遺構 ○印は推定遺構を示す。)

## 第5章 まとめ

今年度の発掘調査は、永福寺中心伽藍の三堂の内、薬師堂の確認に主眼を置いた。その成果については、各章の中で述べて来たとおりである。主眼であった薬師堂の確認は、薬師堂の全域を調査してこれを検出、確認した。さらに薬師堂に取り付く複廊と翼廊の存在まで、確認したことは永福寺の伽藍配置を考える上で、新たに多くの知見を我々に与えてくれた。

薬師堂の規模は桁行5間16670mm(55尺)、梁行4間12720mm(42尺)である。この数値は、昨年阿弥陀堂で計測した数値とほぼ同じである。また薬師堂を取り囲む基壇束柱の配置は、阿弥陀堂の配置と同じであった。堂本体の柱間1間を2間割りにしていること。基壇四隅の角柱の断面形が正方形で、柱見付けを統一していること。複廊が取り付く位置で、複廊の柱間に合わせて束柱の柱間を広げていることなどである。

薬師堂造営尺の復元を木造基壇規模から推定してみた。

基壇桁行〔全長19130mm・現尺63.14尺・推定造営尺63尺〕

基壇梁行〔全長15180mm・現尺50.1尺・推定造営尺50尺〕

推定造営尺と現尺との平均比は、各1.002尺で現尺より僅かの寸伸がある。造営尺をこの数値より求めると、1尺は304mmとなる。

基壇規模は桁行方向で19130mm(63尺)、梁行方向で15180mm(50尺)であり、薬師堂と阿弥陀堂の規模は同一と思われる。

薬師堂・阿弥陀堂の桁行から測ると、桁行方向の軸線は、磁北より西に9.5度程ふれている。

基壇高は地覆の下に入る延石上面の標高と、礎石掘方7内に遺存する原位置を留めている礎石の柱座面との標高差により、約40cm前後のごく低いものだったと推定される。基壇高が低いので、木造の構造でも十分に基壇内部からの側圧を支えきれたものと思われる。

基壇束柱に使われた角柱は、防腐措置を施すとともに、四面ともていねいに平らに加工されている。建物に平行する面の寸法は概ね7寸を計る。このことから角柱は基壇の控柱として基壇内側に

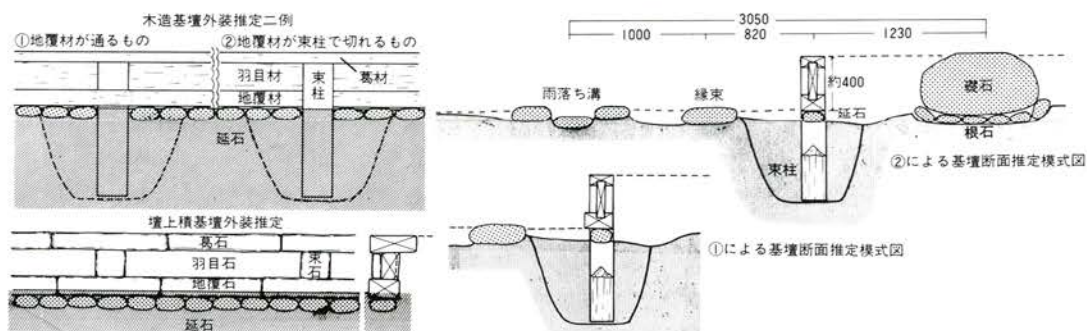


図25 基壇外装推定模式図



埋め込まれたものではなく、化粧の束柱として基壇表に面を見せていたものと推定できる。このよう<sup>註1</sup>な構造を持つ木造基壇は、平泉毛越寺金堂（円隆寺）の翼廊に類例を見る。

この他に数点壇上積基壇の外装用と思われる石材が出土している。東石と地覆石、葛石で、羽目石はないが各石材の高さをたすと木造基壇と大差ない48cmという数値が得られた。いずれも鎌倉石で火災のためか表面が赤黒く変色している。木造基壇の基壇高が低いことや、木造基壇の修理・火災の痕跡が見いだせないこと、現在基壇土が失なわれていることと合わせて、石材の存在は基壇の変遷について、今後検討して行かなければならない課題である。

薬師堂の検出、確認によって永福寺を構成する三堂を一応検出、確認できたことになる阿弥陀堂では不明だった雨落ち溝、縁東が確認され、軒出3050mm、縁出2050mmと計測されたことは薬師堂の姿を復原する上でも、同規模の阿弥陀堂の復原にも役立つものと思われる。三堂が複廊、翼廊で結ばれていたことも今年度の各廊の検出、確認でほぼ確実なことと思われる。

苑池部分は発掘例が少なく汀線など不明な点が多いが、三堂は苑池に東面して浄土形式の寺院を構成している。

薬師堂の位置及び規模が確認されて、三堂の配置が明らかになった。今後は全掘していない左翼廊、複廊の完掘及び池汀線の確認に主眼を置き調査が行われることを期待するものである。

遺物では、出土した遺物の大半が瓦類である。59年度では、創建期に比定される鎧瓦(Y A I 01)、宇瓦(Y N I 01)、女瓦A類、男瓦A種が大半を占め、60年度では、鎌倉後期に比定される(Y A II 06~10)、宇瓦(Y N II 06~12)、女瓦E類が大半を占めていた。

今年度の出土状況は、第2期に比定される女瓦C・D類が女瓦出土総数の約5割を占め、昨年度約5割を占めていた鎌倉後期に比定される女瓦E類の激減である。また第2期に使用が想定される寺銘宇瓦(Y N III 01)が多く出土する半面、創建期の主要瓦である鎧瓦(Y A I 01)、宇瓦(Y N I 01)はさほど出土していない。59年度の調査から、創建期に比定される瓦の大半が池中に廃棄されていると想定される。59・60・61年度の調査で得られた瓦の出土状況は三者三様を呈している。今年度、池を調査していないことも影響しているのだろうか。次年度以後の調査による資料の増加を望むものである。

末筆ながら、発掘調査から出土品の整理等にいたるまで、多くの諸先生、諸先輩から貴重な御教示を受けたこと、周辺住民の深い御理解を賜り、無事今年度の調査を終えたことを記して深く感謝する次第である。

## 本文註

### 第2章

註1 昨年度の概要報告書の中の誤りを訂正する。第2章4、池汀線の項。

誤 池汀線の標高は19.7m前後である。

正 池汀線の標高は18.7m前後である。

### 第3章

註1 『史跡永福寺跡発掘調査概要報告書一昭和60年度一』において「第4章 鑑瓦、宇瓦の型式分類」で記載した。

註2 名古屋考古学会『古代人38・41・43・47』「八事裏山1号窯第1～5次発掘調査報告」名古屋考古学会裏山1号調査団。女瓦F類は上記の八事裏山1号窯群出土の甲組瓦とした軒先瓦に対応する女瓦群と共通の要素をもつ。三渡俊一郎氏より八事裏山窯の資料提供を受けた。

註3 女瓦C類は埼玉県児玉郡沼上にある水殿瓦窯で焼成された製品と思われる。

### 第4章

註1 住田正一「鎌倉古瓦考」『考古学雑誌9-2』1918年

註2 「宗清」銘の文字瓦で大三輪龍彦氏所蔵

註3 註1文献

註4 長勝寺遺跡発掘調査団編「長勝寺遺跡」1978年

註5 赤星直忠「鎌倉だより(-)」『考古学雑誌16-7』1926年

註6 向荏柄遺跡発掘調査団「向荏柄遺跡」1983年、調査担当者の馬淵和雄氏の御教示による。

註7 鶴岡八幡宮境内発掘調査団編「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書」1985年

註8 高橋健自「古瓦に現われたる文字」『考古学雑誌5-12』1915年

註9 註1文献

註10 竹沢嘉範「鎌倉市内出土の人名瓦」『横須賀考古学会年報No26』横須賀考古学会1983年

### 第5章

註1 毛越寺の中で、木造基壇を使ったのは金堂廊、南大門、講堂である。この内、南大門と講堂の基壇は、基壇中に荒削りの木材を控柱として掘立あるいは打ち込んで、その外側に地覆材を廻し羽目板、束柱を釘で外から打ちつけて化粧していた。

金堂廊の基壇は、控柱を使わずにいていねいに四面を平らに加工した角柱を束柱として、掘立て埋め込み束柱間に地覆材を入れて、基壇の内側から羽目板を釘で打ちつけていたと思われる。

平泉／毛越寺と親自在王院の研究 1961年3月 藤島亥治郎